

2014 年度修士論文

古式土師器からみる 3 世紀前後の地域間交流
—近江・伊賀地域を中心として—

三重大学大学院人文社会科学研究科
地域文化論専攻 地域社会文化論専修
113M207 濱村 友美

目次

はじめに	1
第1章 研究の目的及び方法	3
第1節 先行研究と課題	3
第2節 本論における分析について	6
(1) 方法	6
(2) 研究対象の各甕の特徴と区別の指標	6
第2章 近江地域における古式土師器	10
第1節 受口甕	10
(1) 各型式の分布とその傾向	10
(2) 近江と伊賀との型式変化の違い	19
第2節 S字甕	21
(1) 見分けにくい個体の検討	21
(2) 各型式の分布とその傾向	24
第3章 近江地域における古式土師器甕の割合と推移	31
第1節 各甕の傾向	31
第2節 伊賀地域との比較	41
第4章 交流の様相とルート	46
第1節 近江地域	46
第2節 伊賀地域	50
おわりに	53
参考文献	57

表目次

表 1	受口甕出土遺跡一覧	54
-----	-----------	----

挿図目次

図 1	折衷系土器	7
図 2	近江内各地域の受口甕の特徴	8
図 3	本研究で扱う外来系古式土師器甕	9
図 4	本論における甕の各部位呼称	9
図 5	受口甕の型式変化	11
図 6	受口甕の分布(①段階)	13
図 7	受口甕の分布(②段階)	14
図 8	受口甕の分布(③段階)	15
図 9	標高 300m 以上の範囲	16
図 10	受口甕の分布(④段階)	17
図 11	受口甕の分布(⑤段階)	18
図 12	各地域の受口甕の型式変化	20
図 13	六条遺跡の S 字甕	21
図 14	側面積上げ法	21
図 15	受口甕の体部の接合	22
図 16	越前塚遺跡の S 字甕と有段甕の折衷系土器	23
図 17	受口甕と判断した個体	24
図 18	川崎氏による型式分類	25
図 19	A 類(I 段階 a・b)の分布	27
図 20	B 類(II 段階 a・c)の分布	28
図 21	C 類(III 段階 a・b)の分布	29
図 22	D 類(IV 段階)の分布	30
図 23	高坏の形態分類	31
図 24	弥生時代後期の甕の比率	33
図 25	庄内式併行期の甕の比率	36
図 26	有段甕と区別し難い受口甕	35
図 27	布留式併行期の甕の比率	39
図 28	高坏の系統別分布	40

図 29	伊賀における甕形土器の割合	43
図 30	高賀遺跡の受口甕	44
図 31	才良遺跡の受口甕	44
図 32	近江への外来系土器の搬入	48
図 33	湖北的な特徴を持つ受口甕の近江からの搬出ルート	49
図 34	伊賀内部での甕の動き	52

はじめに

弥生時代後期以降、各地で土器交流が活発になる。特に庄内式併行期には、それ以前よりも広域に波及し、地域間交流がいつそう盛んになった。この時期に、伊勢湾沿岸地域では「S字状口縁台付甕」(以下「S字甕」)が広く分布する。

S字甕の研究は、赤塚次郎氏が尾張地域において精力的に行っており、赤塚氏の提示した0類～D類の分類と編年が多くの研究者に支持されている(赤塚 1990)。しかし、近年ではS字甕の胎土分析の結果、中勢地域を流れる雲出川の土が使われている可能性が高いことが判明している(永草康次 1992)。つまり、S字甕の成形には雲出川流域が大きく関わっている可能性が考えられる。

そのS字甕の祖型が、近江地域で弥生時代中期に発祥する「受口状口縁甕」(以下「受口甕」)である。この受口甕からS字甕へ変化する過程をたどり、雲出川流域の土器群で編年案を提示したのが川崎志乃氏である(川崎 2001)。筆者は別稿で、川崎氏の編年と同様の型式変化を示すのが伊賀地域であることを明らかにした。そして、位置関係からみて、受口甕からS字甕への変化が初めて起こったのは伊賀地域である可能性を示唆した。

その際に課題となったのは、他地域での検討を行っていないため、本当に伊賀地域独自の変化であったか検証できていない点である。また、伊賀北部地域ではS字甕を最終的には受容しなくなる様相が認められたが、その原因も追究できなかった。加えて、研究を進める中で、近江地域の古式土師器の甕は多様であり、特に外来系のS字甕に関する研究があまり進んでいないことが明らかとなった。

そこで、本研究では対象地域を広げ、伊賀地域・近江地域の古式土師器の甕に焦点を当てて、以上の課題に迫りたい。近江地域で出土する甕は、大別すると、受口甕とS字甕の他に「くの字状口縁甕」(以下「くの字甕」)と「有段口縁甕」(以下「有段甕」)の4種ある。本研究では、主にこれらを対象とする。有段甕は日本海沿岸地域の系譜を引き、複合口縁と呼ばれる場合もあるが、本論では有段甕の呼称に統一する。

対象年代は、庄内式併行期を主とし、その前後(弥生時代後期、布留式併行期)を含める。受口甕の分布図作成の際は、発祥時期と考えられる弥生時代中期も含めたが、それはあくまで甕の型式を追う場合のみに留める。

対象地域は、旧近江国域と旧伊賀国域とする。当該期は国域制定以前のため、表記は「近江地域」「伊賀地域」とした。以下、本文では地域を省略して記す。また、近江は広域なので、「湖北地域」「湖西地域」「湖東地域」「湖南地域」の四つに分ける(以下、いずれも「地域」を省略)。それぞれの範囲は、現長浜市・米原市域(余呉川・姉川・天野川流域)を「湖北」、現高島市・大津市北部域(石田川・安曇川流域)を「湖西」、現彦根市・近江八幡市域(愛知川・日野川流域)を「湖東」、現野洲市・守山市・草津市・大津市南部域(野洲川・草津川・大津川流域)を「湖南」とする。伊賀は、「北部地域」「中部地域」「南部地域」の三つに分ける(以

下、いずれも「地域」を省略)。それぞれの範囲は、旧阿拝郡域(柘植川・服部川流域)を「北部」、旧山田郡・伊賀郡域(木津川流域)を「中部」、旧名張郡域(名張川流域)を「南部」とする。

第1章 研究の目的及び方法

第1節 先行研究と課題

近江内の古式土師器の研究史

受口甕は湖南の野洲川流域において、弥生時代中期後葉(弥生IV期)に発生したとされる。丸山竜平氏らによって、特に弥生時代後期の甕が「受口状口縁甕」と名づけられ、近江独自の甕として位置づけられた(丸山 1974)。その後、用田政晴氏は甕以外の器種にも注目し、後期後葉の土器の細分案を提示した(用田 1985)。

次いで古式土師器の研究は、資料の増加に伴い、近江各地で編年案が提起されている。受口甕の発祥地とされる湖南では、近藤広氏(1996)、佐伯英樹氏(2003)、伴野幸一氏(2003・2006)、中村智孝氏(2008)らによって編年案が示されている。しかし、施文のバリエーションの多さや、地域によって口縁形態に差が見られることから、編年案は固まっていはいない。加えて、近江では他地域の甕の特徴を組み合わせた「折衷系土器」が多く見られる。例えば、山陰系の口縁部に S 字甕の脚台が付く場合や、S 字甕の口縁部に類似する受口甕等、その組み合わせはバリエーションに富んでいる(図 1)。

施文

受口甕は加飾性の高い甕である。特に口縁部や体部、肩部に施文されることが多く、湖南においてその傾向が強い。しかし、同時期に無文の一群も認められる。湖北・湖南ともに、庄内式併行期には加飾性はしだいに薄れ、布留式併行期には完全に施文はなくなるとみられている。また、口縁部、体部、肩部全てに施文される場合もあれば、一部のみという場合もある。そのパターンは地域によって異なることがわかっている(近藤 2005、中村 2008)。主として煮沸に使われていた甕に、文様を施した理由はよくわかっていない。

受口甕の課題

受口甕から S 字甕へ型式変化したと言われているが、近江内の受口甕の型式変化の中で S 字甕へつながることを検討した研究はない。そのため、伊勢湾沿岸地域出土の受口甕のみで、S 字甕への型式変化が考えられているのが現状である。この点を整理すれば、受口甕から S 字甕へ変化しはじめた段階や地域が明らかになると考える。

S 字甕の研究史

S 字甕の研究は大参義一氏(1968)に始まり、近年では赤塚次郎氏(1986a・1986b・1990・1997・2000)が精力的に行い、S 字甕を O 類～D 類に分類する案が広く研究者に支持されている(赤塚 1990)。しかし、赤塚氏のこの分類には問題があるとする研究者もいる。高木洋氏

は、階層的な分類方法は複雑すぎるため、かえって混乱を招いていると指摘する(高木 1998・1999)。同様に味噌井拓志氏も、口縁部の型式変化のみでなく、施文の有無や調整痕の有無なども加味して分類する方法では、型式によって分類基準が異なってしまう、結果として型式的統一性を欠くと批判した(味噌井 2010)。

こうした指摘に基づき、改めて S 字甕 0 類の典型とされる八王子遺跡(一宮市) SK73 出土資料と、阿形遺跡(松阪市) SD103 出土の資料を比較すると、前者は口縁端部のつまみ出しが明確で、端部の面もほぼ平らであるのに対し、後者はつまみ出しが弱く、口縁端部の面も内傾している。同じ S 字甕 0 類でありながら、両者の口縁部形態には大きな差があり、たしかに型式的統一性を欠いていることがわかる。

一方、S 字甕の型式変化は、三重県内でもいくつか提示されている(川崎 2001、味噌井 2010・2011)。これらは、祖型を近江系受口甕に求める。伊勢湾沿岸地域で出土する受口甕が近江系のものか伊勢系のものか議論はあるが(穂積 2005)、早野浩二氏は伊勢地域(特に中～南勢地域)出土の受口甕から成立期 S 字甕への型式的連続性は明らかであるとする(早野 2000)。川崎氏の編年案は、この考えに基づき S 字甕の型式変化を推定している。

さらに近年、現亀山市に所在する地蔵僧遺跡において、近江系受口甕から S 字甕へと変化する土器の様相が把握された(味噌井 2011)。近江に隣接する亀山市は近江との土器交流が盛んであるが、地蔵僧遺跡出土資料は、まさに近江系受口甕から影響を受けて変化し始めた様相を示しており、従来想定されてきた S 字甕 0 類の一型式前のものと考えられる。この成果から、雲出川地域と近江とは直接的に交流していたのではなく、鈴鹿・亀山地域などの北勢諸地域を経て近江から土器が伝わった可能性が示唆された。

伊賀の S 字甕

伊賀では、門田了三氏(1980)、仁保晋作氏(1985・1992)、上村安生氏(2002)、石井智大氏(2010)による編年案があるが、それぞれの研究について石井氏は、複数の遺跡・遺構資料を比較しているため、編年の基準となる型式の認定とその組列の妥当性は保証できないとする。そして、出土個体数の多い甕と高坏に注目し、編年の基軸となる型式分類を行った上で、個々の出土資料と照らし合わせながら時期区分を行った。しかし、この分類は赤塚案を使用しているため、受口甕から S 字甕へのつながりに着目できておらず、受口甕に関しても「全形を知ることのできる資料が少なく、現在ではその実態を知ることができない」として考察されていない。

これらの課題を克服するため、筆者は別稿で、一括資料によって口縁部のみに注目した型式変化案を提示し、伊賀全域の受口甕・S 字甕の様相を把握するよう試みた(濱村 2013)。その結果、伊賀北部では受口甕が多く出土し、川崎氏の試案した編年とほぼ同じ変化をたどることが明らかとなった。また、伊賀北部は S 字甕の初現的形態を生み出した地域である可能性を示唆した。一方、伊賀北部では最終段階の S 字甕を受容していないことも判明し、その解明が新たな課題となった。

近江内の S 字甕

S 字甕は近江内ほぼ全域に普遍的に分布し、出土量全体の 3/4 ほどを湖北が占めると言われている(小竹森 1991)。ただし、湖北の中でも最北域からはほとんど出土していない(黒坂・沢村 2010a)。多いのは、湖北南部の姉川流域で、現状では湖西地域への波及は湖北南部地域が担ったとみられている。

近江内の各遺跡における S 字甕の出土量は少なく、数的に主体となるものではない。ただし、調査区によっては 10 個体ないし出土土器の 1 割を超える場合もあるが、ごく稀である。このように、遺跡や遺構によって出土量に差が見られるが、外来系土器の波及の中心となった遺跡もしくは地域が存在していたからであろう。出土量が最も多いのは湖北だが、その他の地域にも拠点と推定されている遺跡はある(湖南・石田三宅遺跡、湖東・斗西遺跡等)。これまで、S 字甕は搬入品のみと考えられてきたが、湖北における研究で、在地系の胎土を持つ個体も存在することが明らかとなった(黒坂・沢村 2010a)。

S 字甕を A~D 類まで継続的に受容している遺跡は現状では見られない。しかし、D 類も少量ではあるが出土しているため、総体的には弥生時代後期から古墳時代中期まで受容していたといえる。数量は B 類が最も多く、C・D 類と時期が下るにつれ減少する。

S 字甕の課題

研究史をふまえて、S 字甕についての課題を以下に列举しておこう。

- a. 伊賀北部で初現とみられた型式が、近江内の受口甕の型式変化にないのか検討できていない点。つまり、受口甕の型式変化の中で既出かどうかを検討していない点。
- b. 東海地域で主体的な S 字甕と、近江で分布している客体的な S 字甕との土器編年が一致するのかが検討されていない点。特に S 字甕が多く出土している湖北地域でも、S 字甕の類型や編年案などは検討されてこなかった点。
- c. S 字甕の類型なのか判断が難しい個体が見受けられるが、それらの検討と認定が不十分である点。
- d. 湖北では在地系の土で作られた S 字甕が見受けられるが、湖南では調査されていない点。
- e. 湖南では、S 字甕の出土量は少なく、古墳時代中期頃まで受口甕を主体としていた様相がわかっている。そのため、外来系土器を搬入しない保守的な地域と言われてきた。しかし、高坏には東海系の様相も多く見られる場合もあり、ただ保守的だったためと片付けてよいかわからない点。

第2節 本論における分析について

(1) 方法

以上の課題に迫るため、大きく二つの分析を行う。

一つ目は、湖南を中心とする近江内の受口甕及び S 字甕の型式ごとの分布状況の考察である。伊賀で出土している受口甕や S 字甕初現と推定される型式が、近江でも出土していないかを探る。そのため、型式分類とその変遷は筆者が別稿で提示した試案によるものとする。ただし、この分類は、伊賀から出土した資料をもとにしたものであり、近江全域に適用するには問題がある。したがって、受口甕の分類には再考の余地があるが、S 字甕初期の型式を探す点では有効と考えている。

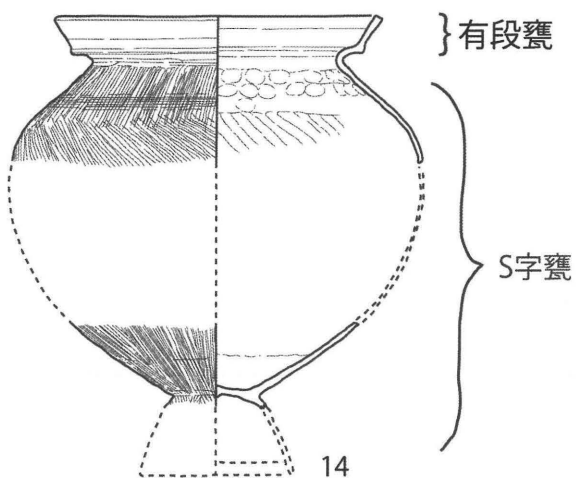
二つ目は、近江・伊賀における古式土師器の甕の波及状況の考察である。近江の甕に焦点を当てた土器交流に関する検討は、黒坂秀樹・沢村治郎両氏により始められたばかりである(黒坂・沢村 2010b)。この研究は、特に湖北・湖西を中心としたもので、外来系土器の出土様相に差があることが明らかとなった。湖南における分析は未だ進んでいないが、湖北や湖西、湖東とは違った土器様相が概観できる。そこで、受口甕と S 字甕の近江内での位置づけをより明確に理解するため、基本的に各報告書の分析にもとづき、出土する甕を時代・種類ごとに集計する。そして、それらの状況と伊賀の状況とを比較し、各地域の交流関係を明らかにしたい。

(2) 研究対象の各甕の特徴と区別の指標

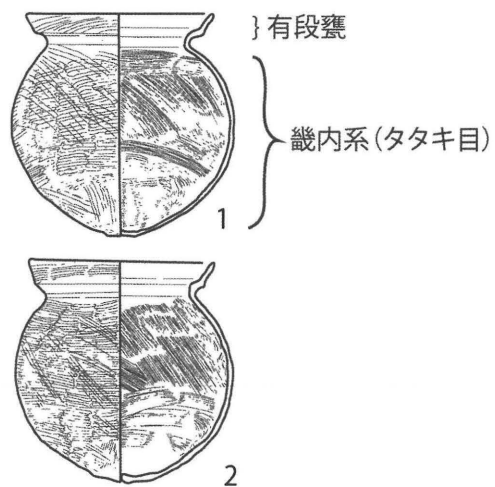
先述したが、受口甕は各地域によって施文に特徴が見られる。そのパターン(図 1)と、胎土の色を指標として、どの地域のものか区別していく。湖南の胎土には粗い石が混じり、全体的に白っぽい。湖北の胎土も粗い石が混じるが、全体的に褐色を示す。ただし、胎土の色は焼成等により差が生じるため、参考程度として扱う。

S 字甕は、搬入品であれば胎土が緻密で、粗い粒はほぼ混じらない。器壁も受口甕に比べるととても薄く、重量も軽い。

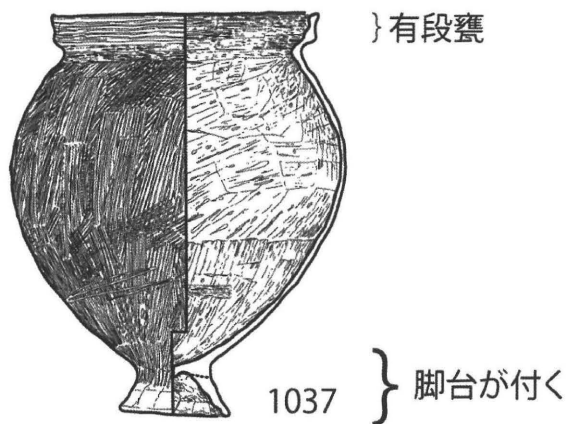
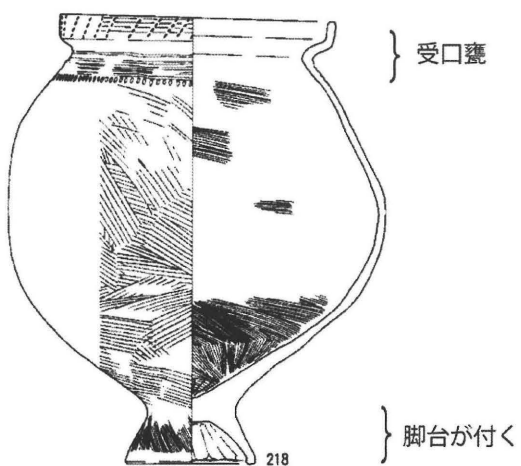
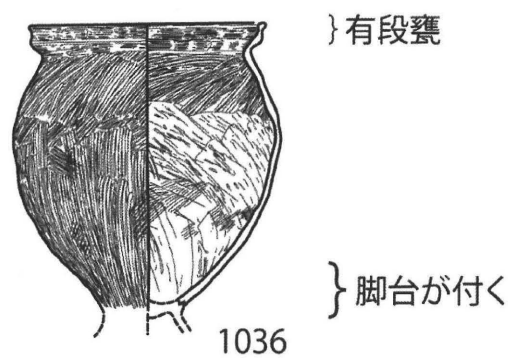
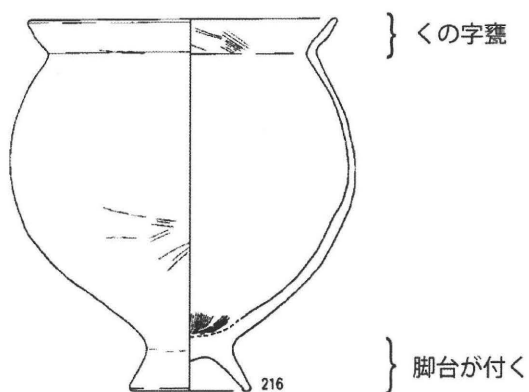
くの字甕、有段甕は以下のように、口縁部の形態に大きな差が見られ、比較的区別しやすい。くの字甕は、さらに庄内式か布留式か判別できるものは可能な限り記す(図 3)。



(98)越前塚遺跡(1次)



(64)柿田遺跡

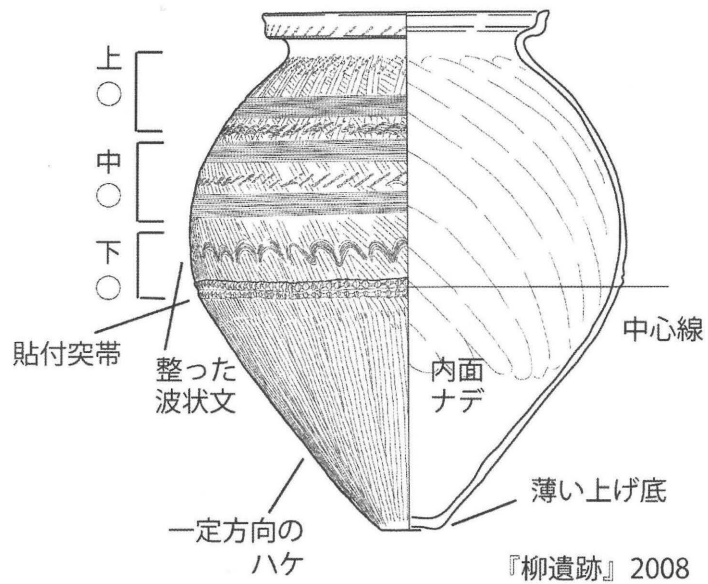


(65)高田遺跡

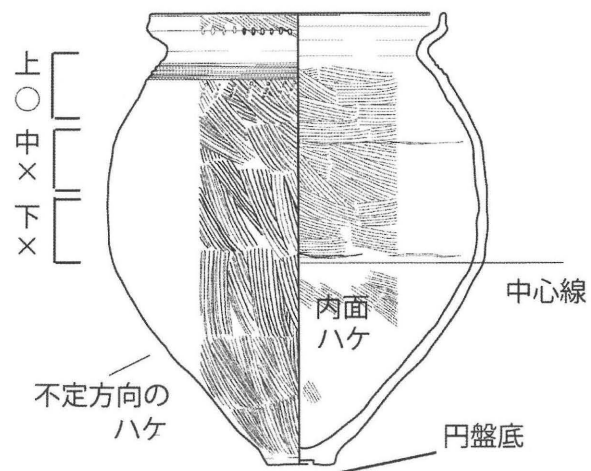
(70)北郷里小遺跡

図 1. 折衷系土器

南部



北部



『針江北・針江川北遺跡(Ⅰ)』1992

北部(湖東)

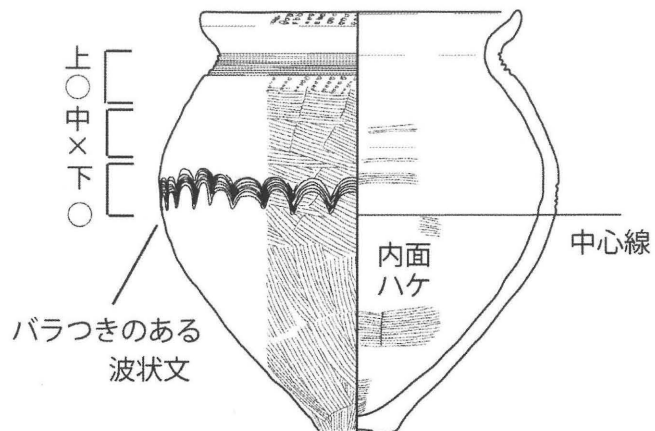


図 2. 近江内各地域の受口甕の特徴

『針江北・針江川北遺跡(Ⅰ)』1992

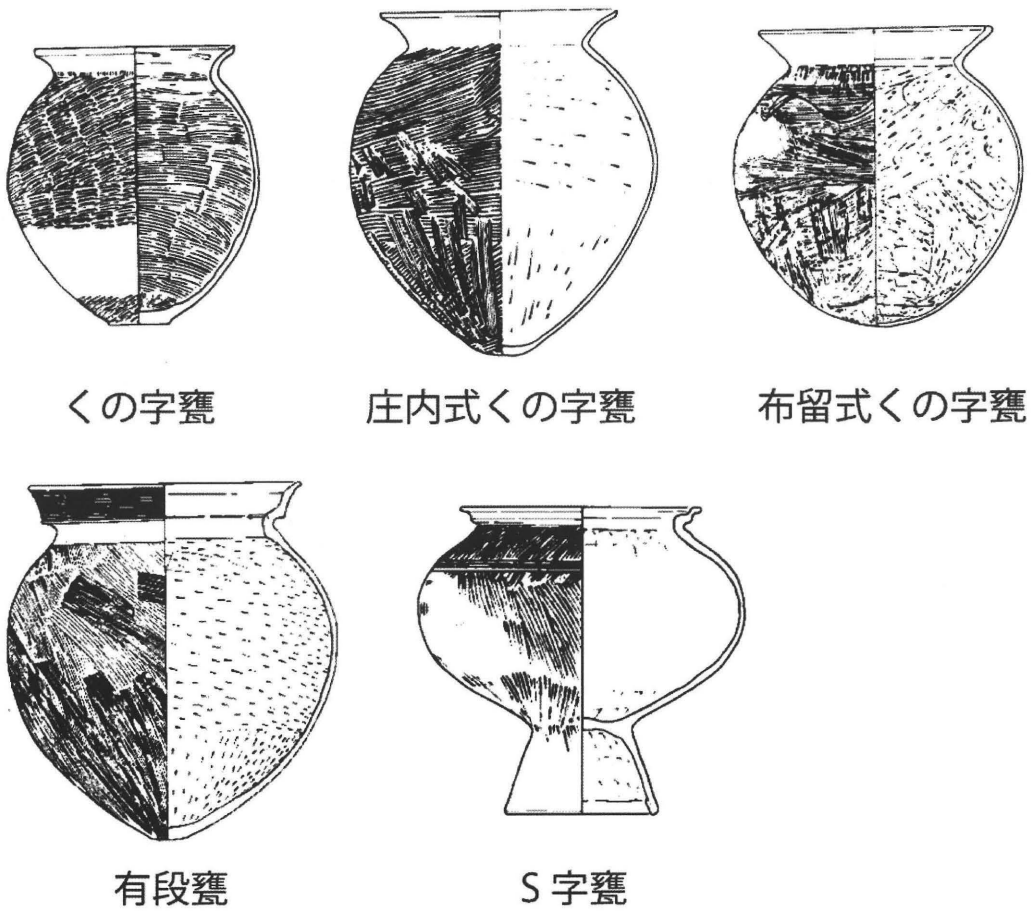


図 3.本研究で扱う外来系古式土師器甕

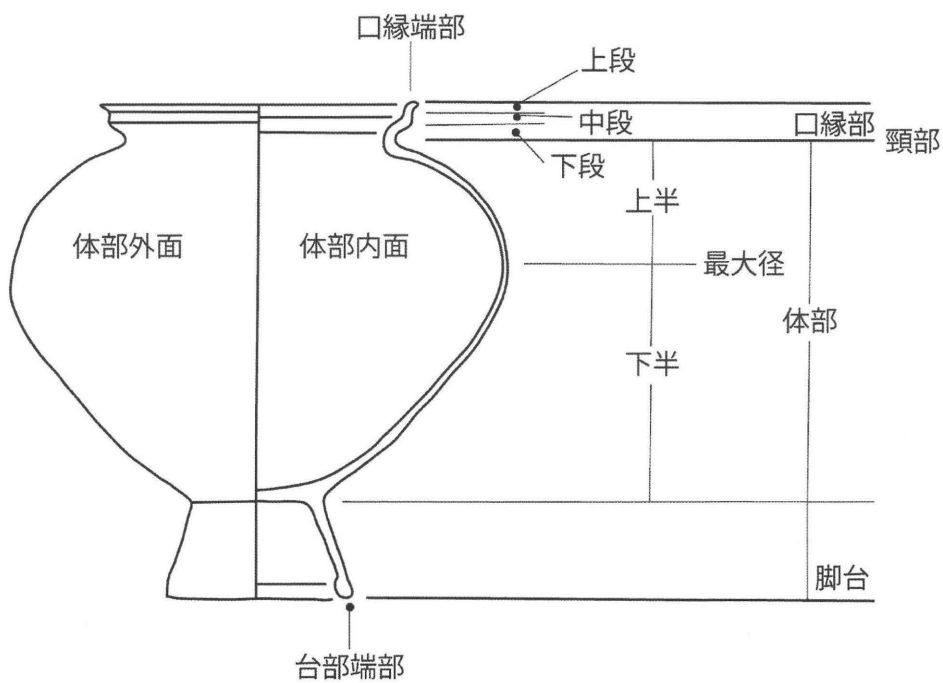


図 4.本論における甕の各部位呼称

第2章 近江地域における古式土師器

第1節 受口甕

(1) 各型式の分布とその傾向

まず、伊賀地域で提示した編年試案(図5)にもとづき、各型式が近江全域でどのように動いているか、S字甕の初現的型式(⑥段階)が近江に存在するかを検討した。

①段階

口縁部が受口状を呈し始め、口縁端部を丸く収める型式を受口甕の①段階とした。これが出土するのは野洲川と草津川流域の湖南、姉川・余呉川流域の湖北、石田川・安曇川流域の湖西というように、限られた地域のみである(図6)。なお、この型式は、近江内での受口甕の型式変化ではこれまで想定されていなかった。出土量が少なく、分布も局地的であるが、その存在が確認できたことは新たな成果である。

②段階

口縁端部に面が形成される型式を②段階とした。この段階になると、愛知川・犬上川流域の湖東や、現在の津市南部の湖南といった、①段階では見られなかった地域にも波及している(図7)。また、野洲川・草津川流域の湖南、姉川流域の湖北南部でも出土する遺跡数が増えていることがわかる。

③段階

口縁端部の面がやや内側に傾き、外側の端部を少しだけつまみ出す型式を③段階とした。総体的に見ると、この段階と次の④段階が近江全域で最も盛行する(図8)。特に湖南から湖東、湖北にかけて多く広がるようである。湖南の日野川では、下流域まで波及している様相がわかるが、同じ湖南の野洲川下流域は当該期の遺跡調査件数が少なく、実態が明確につかめなかった。

現在の津市北部や中部といった湖西で受口甕が見られないのは、受容しなかったのではなく、遺跡自体が存在しないからである。近江は周囲が山に囲まれており、特に湖西では平地が少ない(図9)。津市には北部から中部にかけて比良山地が続いているため、集落はほとんどなかったのではないだろうか。

④段階

口縁端部の面の傾きがより明確になり、口縁上部が外湾する段階である。分布状況は③段階と変わらず、近江全域で使用されており、この段階までが受口甕の盛行期である(図10)。

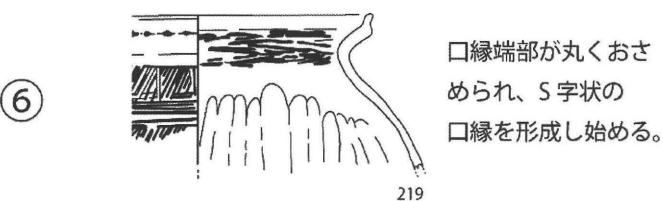
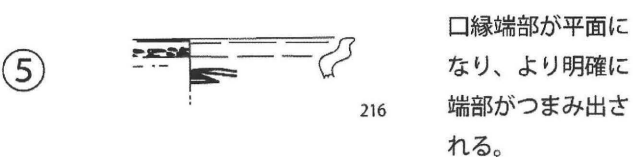
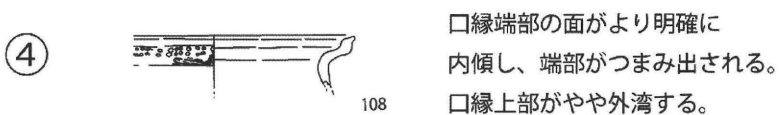
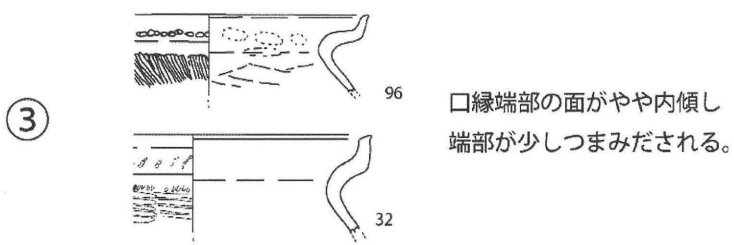
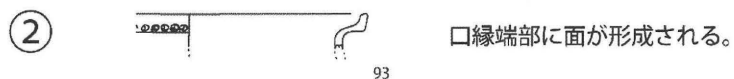
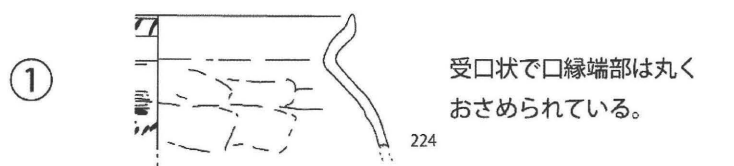


図 5. 受口甕の型式変化

⑤段階

口縁端部が平面となり、外側に強くつまみ出される段階である。この段階になると、湖南以外の地域では出土量が少なくなる(図 11)。一方、湖南ではひきつづき多数の遺跡で使用されているが、総体的に見ると受口甕の衰退期と言える

⑥段階

つまみ出されていた口縁端部が丸く収められ、S字状を呈し始める段階である。筆者はこれを、S字甕の初現的型式と考えている。伊賀地域ではこの型式が見受けられたが、近江では出土していなかった。実測図上では見分けにくい個体もあるが、実見した結果、全て受口甕の範疇に収まる。これらの個体に関しては次節でまとめたい。近江の全ての遺跡は網羅できていないが、⑥段階の出土は伊賀・伊勢に限られると推定する。

以上、近江全域における受口甕の型式ごとの分布状況を見てきた。S字甕の初現的型式が近江になかったことがわかったため、近江内の型式変化の中で生まれたものではないと結論づけられる。また、伊賀出土の受口甕で想定した編年試案からではあるが、近江内の受口甕の変化をたどることができ、伊賀と近江の間で継続的な土器の交流があった可能性が高まった。しかし、今回の調査で、伊賀にはなく、近江のみで見られる型式があることもわかった。この型式についても次節で述べることとする。

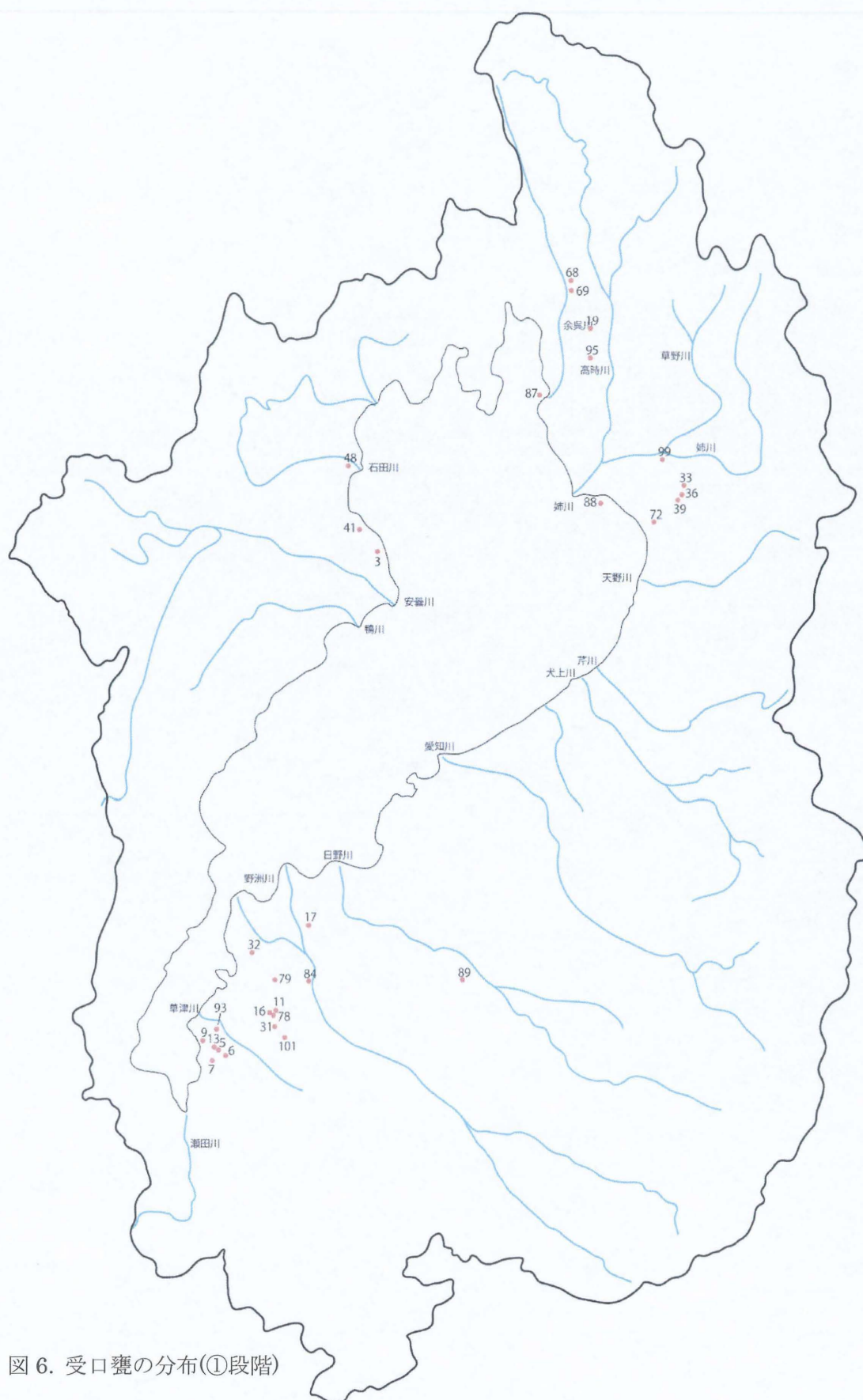


図 6. 受口甕の分布(①段階)

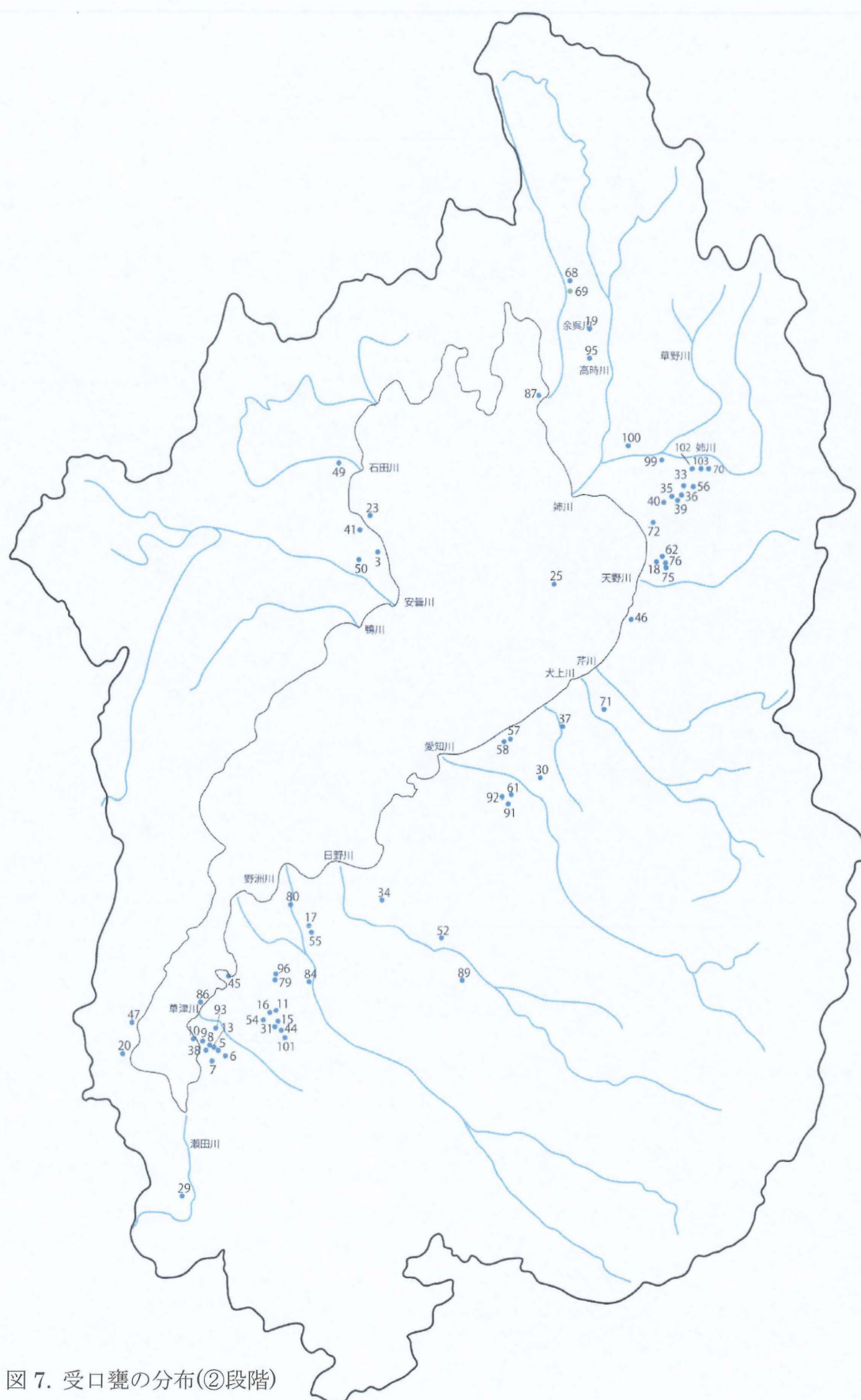


図 7. 受口甕の分布(②段階)

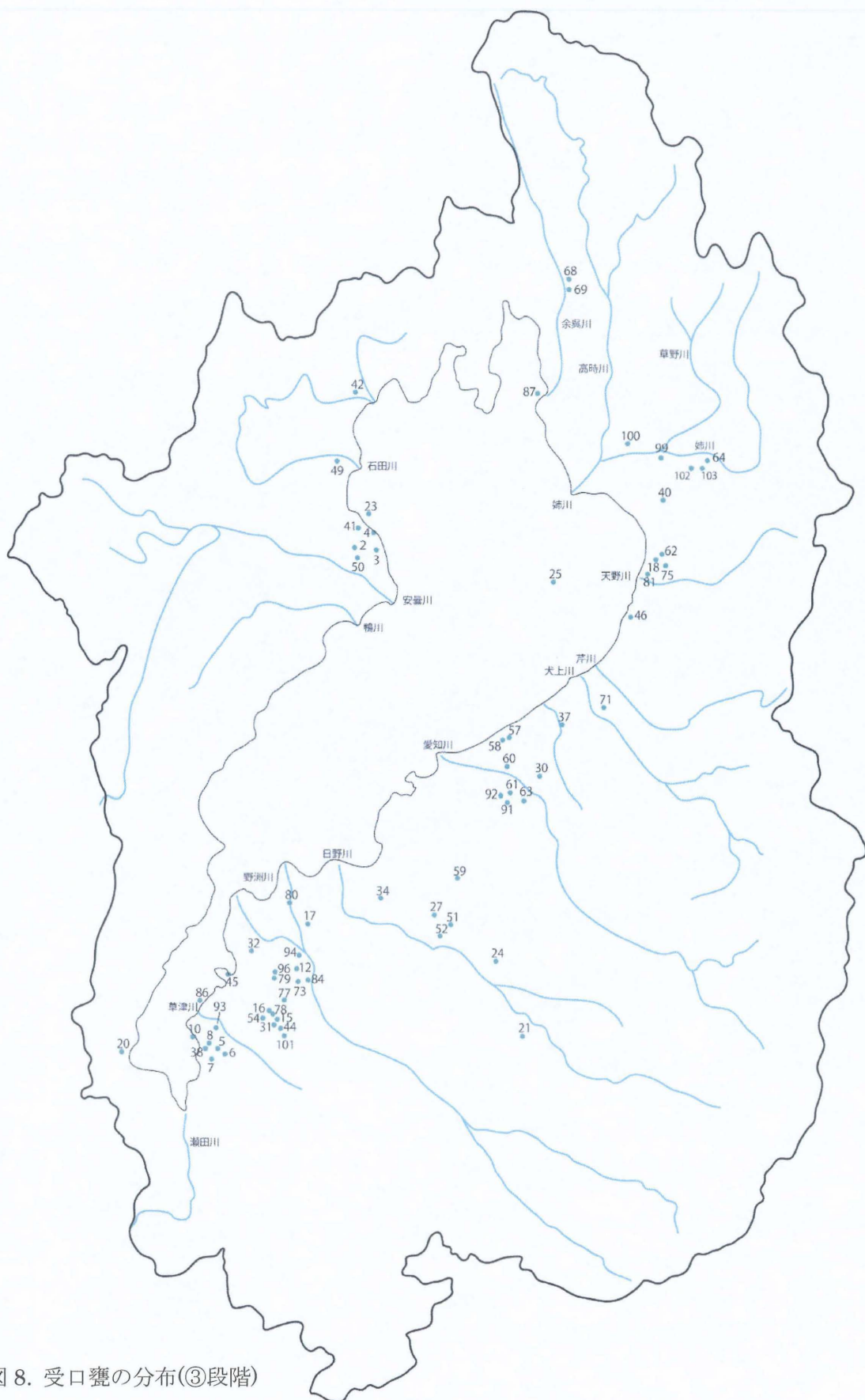


図 8. 受口甕の分布(③段階)

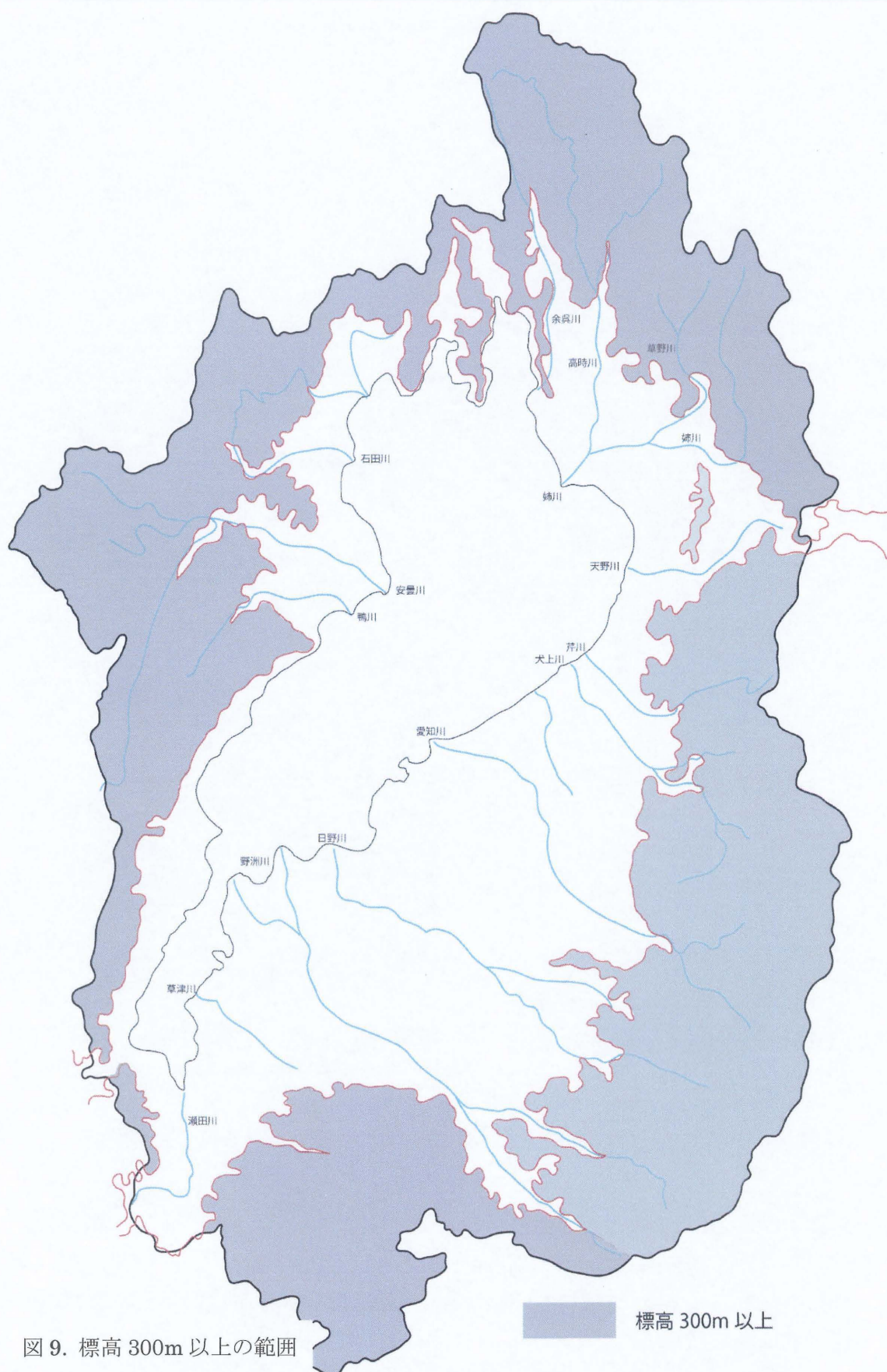


図 9. 標高 300m 以上の範囲

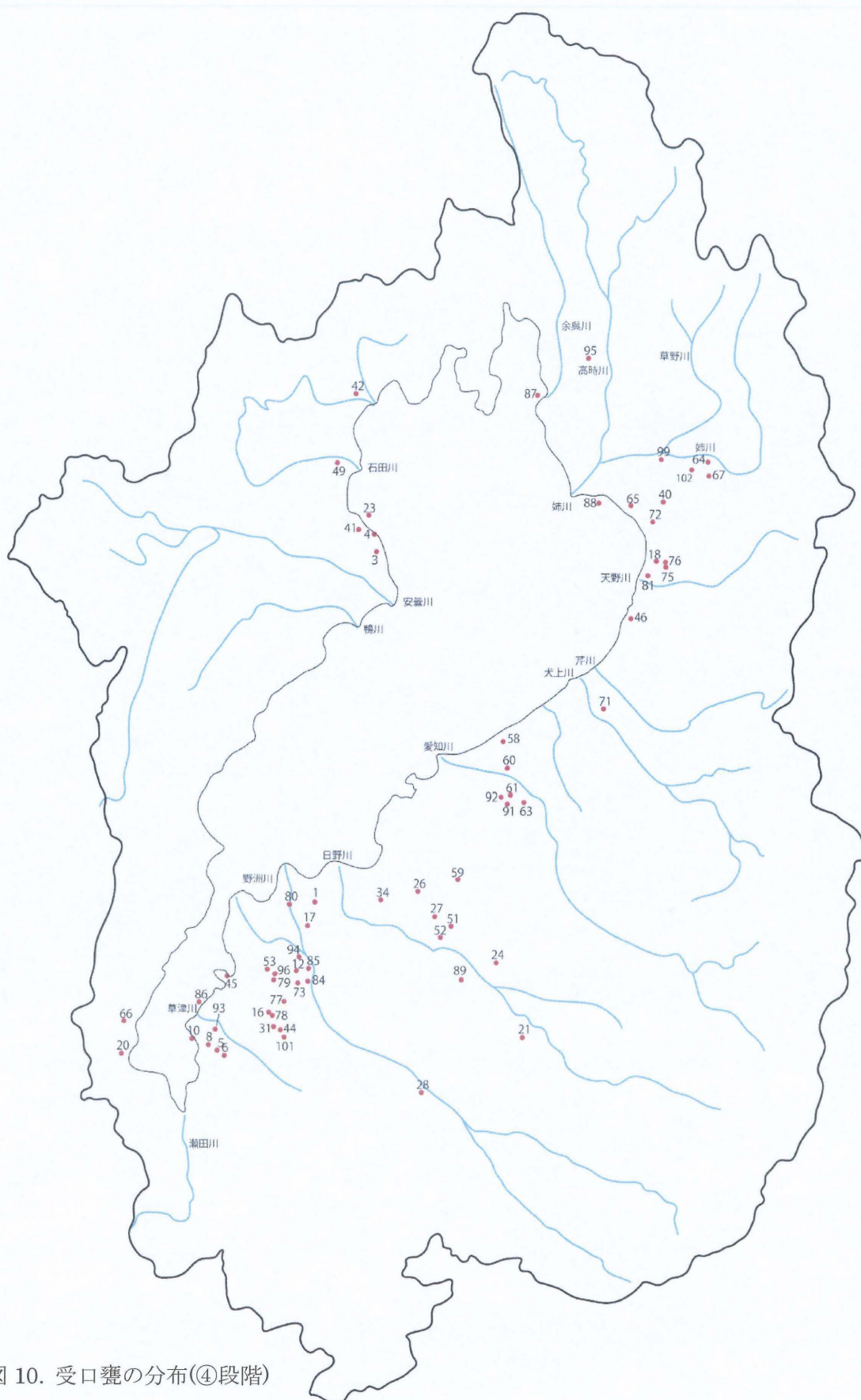


図 10. 受口甕の分布(④段階)

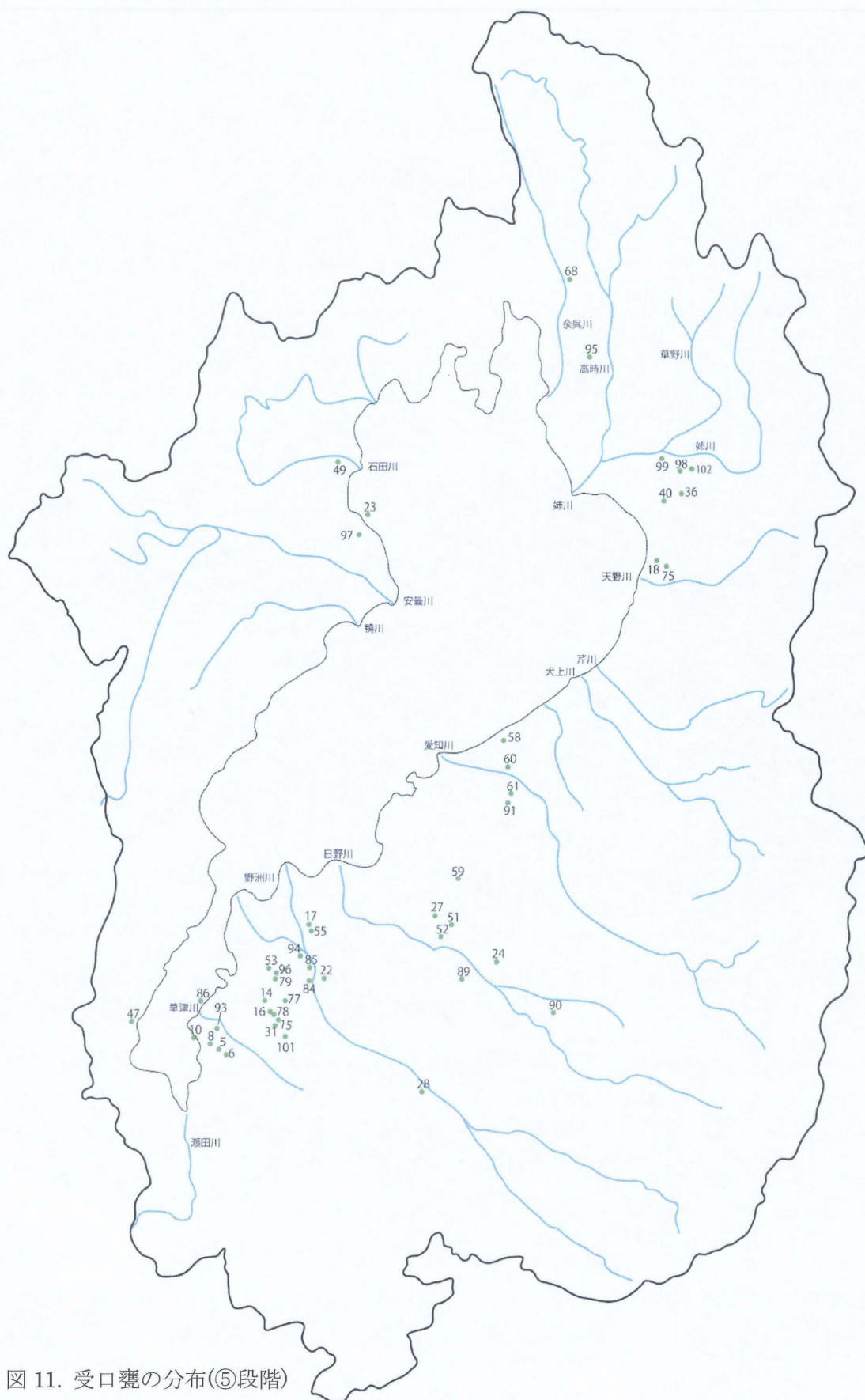


図 11. 受口甕の分布(⑤段階)

(2) 近江と伊賀との型式変化の違い

近江で提示されている編年案と伊賀・伊勢のそれを比較すると、図 12 のようになる。先述したように、⑥段階は近江では見られなかったが、近江では⑤段階以降はつまみ出された口縁部が次第に外傾していくようだ。この段階の型式が伊賀になく、近江独自の受口甕の最終形態となる。本稿ではこれを近江最終形態と称す。このように、近江と伊賀で違った変化を遂げた理由は、土器を移動させて交流していたのではなく、工人が移動して受口甕の作り方を広めていたからだと推測する。以下は、その場合に想定できる交流の形である。

《受容する側が交流を停止した場合》

A. 近江最終形態がそもそも伝わらなかった。

- ・近江内で受口甕が⑤段階に変化するまでは、近江から伊賀へ工人が継続的に技術を伝えていたが、伊賀で S 字甕の初現的な形態が生み出され、その後、伊勢から S 字甕を受容するようになったため、近江最終形態の受口甕を製作する工人を受け入れなくなった。
- ・伊賀が近江から工人を受け入れたのは一時的な期間のみで、その後、他地域へ工人が移動したため、近江最終形態が伝播しなかった。

B. 受け入れを拒否した。

- ・近江から伊賀へ近江最終形態も伝わったが、なんらかの理由で伊賀が受け入れを拒否した。

《波及する側が停止した場合》

- ・⑤段階になるまで継続的に他地域へ工人が移動していたが、近江側になんらかの理由が生じ、工人の移動がおこなわれなくなった。

以上の可能性を考えているが、このうちどれが正しいか、結論を出すことはできなかった。ただ、本分析において、明確となったのは以下の 3 点である。

- ・⑥段階は近江の受口甕には見られず、伊賀・伊勢独自の変化であること。
- ・⑥段階が近江に伝わることはなかったこと。
- ・近江最終形態が、伊賀には伝わらなかったこと。

伊賀ではこれまで、近江との交流が深いと指摘されてきたが(中浦 1993、笠井・館 1995・1996)、相互交流ではなかった可能性が浮かび上がってきた。次節では、近江に分布する S 字甕を型式ごとに見ていこう。


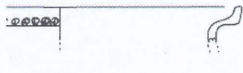
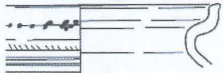
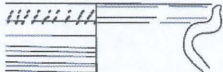

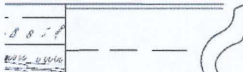
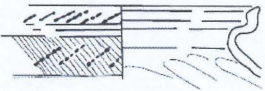


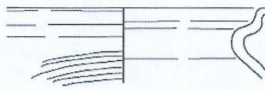
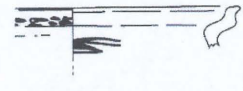


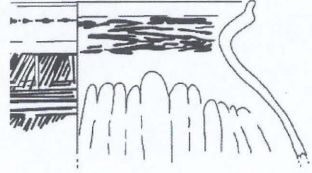



<p>近江 受口甕型式变化</p> <p>中村智孝 (2008)</p>	<p>伊賀 小芝遺跡受口甕</p>	<p>伊勢 S字甕型式变化</p> <p>川崎志乃 (2001)</p>
	②  93	
 	③  96  32	
	④  108	<p>仮 A 段階 (O 類相当)</p> 
	⑤  216	<p>仮 A 段階</p> 
	⑥  219	<p>I 段階 a (A 類相当)</p> 
<p>近江最終形態</p> 		<p>I 段階 b (A 類相当)</p> 
異なる変化		同様の变化

図 12. 各地域の受口甕の型式变化

第2節 S字甕

(1) 見分けにくい個体の検討

S字甕を分類していく中で、模倣品や折衷系など見分けにくい個体があった。また、受口甕かS字甕か判断が難しいものも多々あったが、前節で述べたように、そのほとんどは実見すると受口甕の範疇で捉えられる。しかし、先行研究における課題として指摘したように、近江内では個体レベルの検討がなされていないため、まず本研究において判断できた個体に関する考察を述べ、次にS字甕の分布結果へ移る。

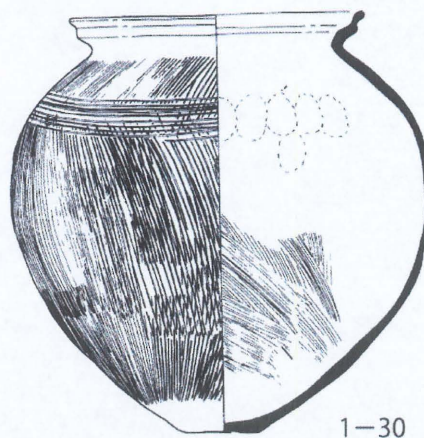


図 13. 六条遺跡の S 字甕

六条遺跡(地図中番号 17)

野洲川流域に所在する六条遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多く出土する。特に庄内式から布留式併行期の土器が多く、S字甕も数点出土している。

第 1 トレンチ包含層から出土している個体(報告書内番号 1-30)は、脚台が付されていないが、報告書ではS字甕とされる(造酒・濱 1990)。調整技法や口縁部形態、施文はS字甕の特徴を備えるが、脚台のないS字甕は東海には存在しないため、慎重な判断を要する個体である(図 13)。実見する以前は、湖南で作られた受口甕とS字甕の折衷系かと想定していたが、胎土が明らかに湖南のものとは異なる。また、東海のS字甕と比べると、体部外面のハケ目がかなり粗雑で、おそらく近江内で作られた模倣品であろう。底部の形態が湖北の形態であったことから、胎土を比較したところ、湖北南部地域の胎土と類似したものであることがわかった。つまり、この個体は湖北南部において製作された受口甕とS字甕の折衷系である可能性が高い。

一方、この個体がS字甕の製作途中段階である可能性も検証した。脚台が付されれば、ほぼ完全にS字甕の形態となるため、脚台をつける直前の段階で放置された個体なのか、想定した

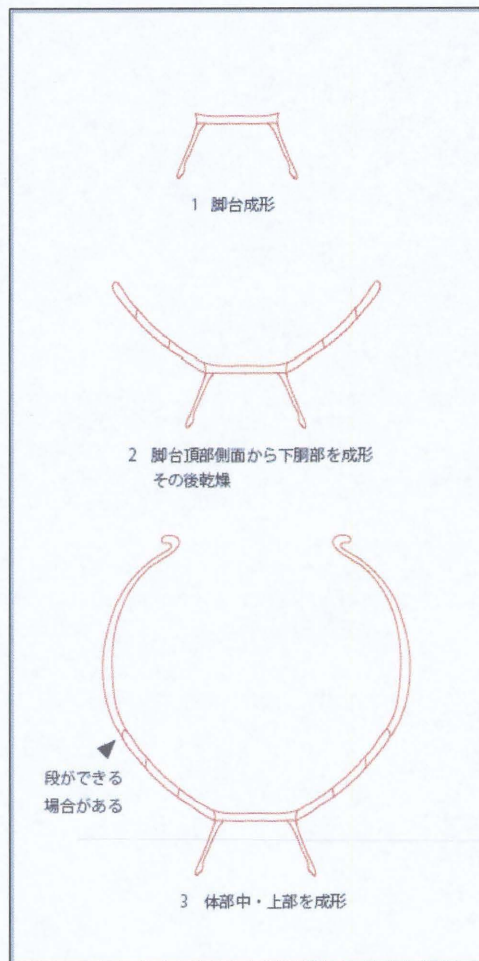


図 14. 側面積上げ法

通り、受口甕と S 字甕の折衷系なのかを判断するためである。

S 字甕の成形技法は、赤塚次郎氏が示している(赤塚 1986b)。それによると、成形第 1 段階に脚台が作られ、粘土円盤の上に粘土紐を 2 回積み上げ脚台を成形し、台部端部は折り返して整える(図 14-1)。次に、体部下半下位が成形される。脚台を倒し、粘土紐を 2~3 回積み上げた所で、時間をかけて乾燥を行う。この乾燥において、脚台と体部下半下位の接合面を補強し、続く上半への成形に備えるのである(図 14-2)。この成形技法は、深澤芳樹氏(1991)・村木誠氏(2005)の提唱する「側面積上げ」という方法と同じである。台部頂部の側面から粘土を積み上げていくもので、大きく以下の 3 段階の工程に分けられる。なお、以下は村木氏の用語を引用するため、甕の各部名称は本論とは異なる。

1. 台部の成形。器面調整、乾燥。台の上面は閉じているものが多い。
2. 台頂部側面から、胴部を積上げ、下胴部で中断し、乾燥させる。
3. 胴部中上位の積上げ。器面調整。

この成形技法の場合、体部下半が乾燥した後、体部上半を積上げることにより、体部下半下位にわずかな段をなす例がある(図 14-3)。また、この技法で成形された甕は、脚台頂部側面や体部下半上半とのつなぎ目に剥離面が見られることも多い。ただし S 字甕は器壁が薄いので、明確な剥離面は認められないものがほとんどである。

以上のように、S 字甕は脚台から作り始めるため、六条遺跡の個体は S 字甕として作られたわけではないことがわかった。また、この個体には体部下半に剥離面が残る。この部分で剥離を生じるものは、受口甕に多い。それは、体部下半と上半との接合部だからである(図 15)。これらの点から、六条遺跡の個体は S 字甕と受口甕との折衷系と判断される。

近江内で出土している S 字甕が、搬入品ばかりでなく、在地の土で作られた模倣品も存在する証拠の一つとして位置づけられよう。近江では、これまでの調査で、湖北に S 字甕の模倣品が存在することはわかっていたが、湖南ではまだ見つかっていない。六条遺跡の個体は、湖北で作られた模倣品が湖南へ搬入されたものであり、結果として今回の調査でも、湖南で作られた模倣品は見つからなかった。

これまでは、S 字甕といえば搬入品と安易に判断されてきたため、近江の古式土師器の実態は未だ十分に解明されていない感がある。今後、東海から近江湖北への工人(または工人集団)の移動があった可能性や、その後の工人らの動き(他地域には移動しなかったのか等)を視野に入れて、研究を進めていく必要があるだろう。

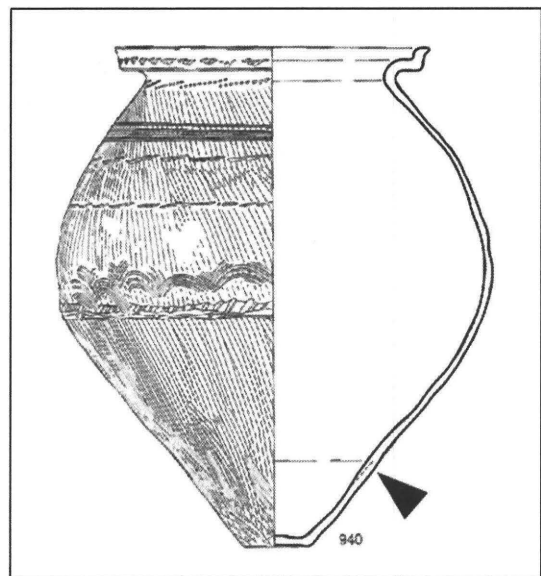


図 15. 受口甕の体部の接合

越前塚遺跡(地図中番号 98)

姉川流域に所在する越前塚遺跡では、SX55 から出土した個体(報告書番号 14)を S 字甕と有段甕の折衷系と判断した。脚部と体部中段が欠損しているため断言はできないものの、体部が S 字甕、口縁部が有段甕であろう(図 16)。S 字甕特有の脚部だったかまでは判断できないが、体部外面のハケ目は S 字甕の特徴をもつ。同遺構出土の有段甕と比べると、口縁部が薄く、S 字甕の体部に合わせた可能性がある。

受口甕と判断した個体

以下は実測図だけでは判断が難しかったが、実見して、胎土や厚さから受口甕と判断した個体である(図 17)。志那湖底遺跡の個体は、長く水中にあったため、胎土が他の甕とはかなり異なり、器壁も薄くなっていたが、琵琶湖の湖底遺跡ではよく見られる変化の範疇であり、胎土に粗粒を多く含んでいるので、受口甕と判断した。

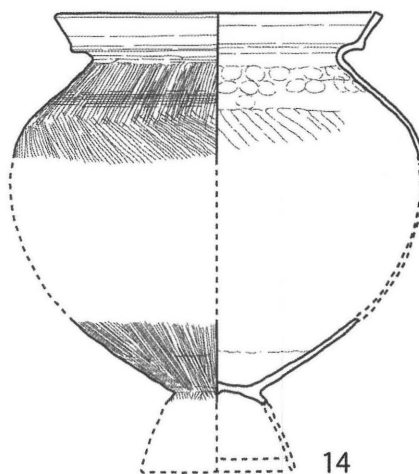
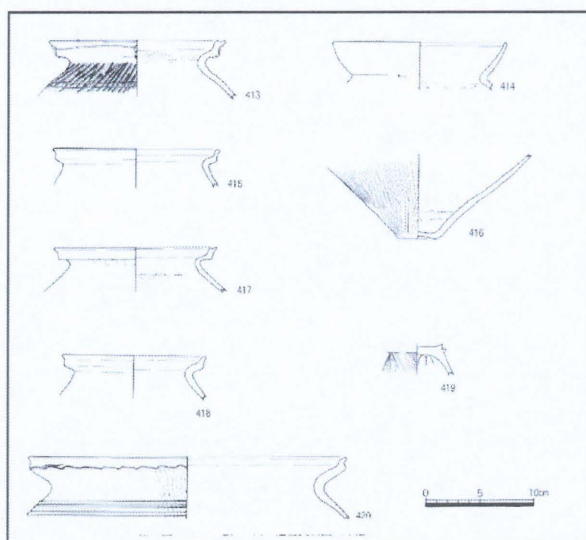
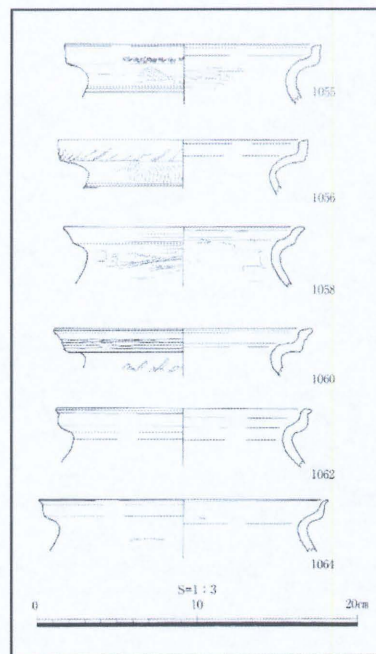


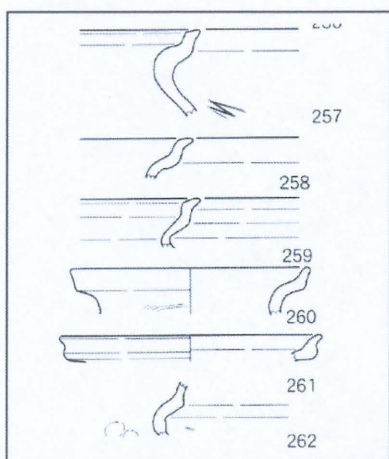
図 16. 越前塚遺跡の S 字甕と有段甕の折衷系土器



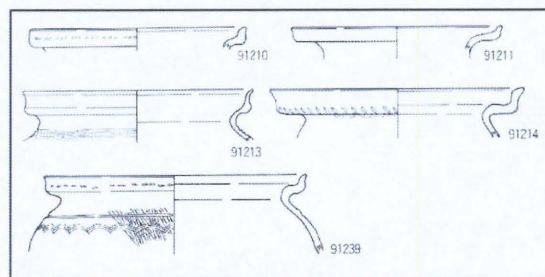
1. 芝原遺跡 (418・420)



3. 志那湖底遺跡 (1064)



2. 針氏城遺跡 (261)



4. 二ノ畦遺跡 (91213・91239)

図 17. 受口甕と判断した個体

(2) 各型式の分布とその傾向

さて、近江における型式ごとの S 字甕の分布を見ていこう。型式分類は、受口甕から S 字甕への連続的な変化を想定する川崎志乃氏の案に従う(図 18)。ただし、川崎氏の分類はかなり細かく、近江内で S 字甕を出土する遺跡も限られるため、分布については赤塚氏の A~D 類の大きく四つに相当させて報告する。

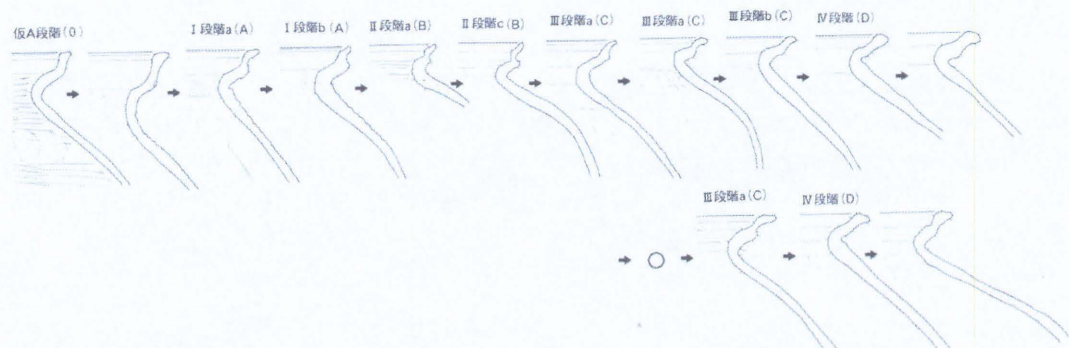


図 18. 川崎氏による型式分類(川崎 2001)

A 類(川崎案 I 段階 a・I 段階 b)

ほぼ湖北から出土している(図 19)。全て実見したわけではなく、報告書や先行研究に拠る部分が大きい。この段階から近江に搬入されていたのは間違いないだろう。また、搬入ルートでは、湖北南部が窓口となった可能性が高い。

ちなみに、筆者は昨年、湖南から伊賀へのルートが存在した可能性を示唆した(濱村 2013)。S 字甕が伊勢の雲出川流域で生まれたのなら、近江への最短のルートは伊賀を経由するものであろう。そのルートは通らず、伊勢から海路で尾張へ伝わり、美濃を経て近江(湖北)へ搬入されたのだろうか。

ただし、日野川流域から 1 点、A 類(I 段階 b)が出土している点は注意しなければならない。日野川の先にある鈴鹿山脈を越えると、鈴鹿・亀山地域へとつながる。今回は三重県内の検討を伊賀地域に絞ったが、鈴鹿・亀山地域からも伊賀地域と類似する S 字甕の初現的形態が出土している。とすれば、湖南から伊賀に向かう工人と、鈴鹿・亀山地域に向かう工人が両方存在した可能性がある。S 字甕が伊勢から伊賀を経て近江(湖南)へ搬入されることはなかったのかもしれないが、鈴鹿・亀山地域を経て近江(湖南)へ搬入された可能性は、今後検討する必要があるだろう。

B 類(II 段階 a・II 段階 c)

この段階になると、数は多くはないが、近江のほぼ全域で出土している(図 20)。多いのは湖北である。

C 類(III 段階 a・III 段階 b)

出土する遺跡が増加し、この時期が近江における S 字甕受容の最盛期である(図 21)。東海でもこの段階が最盛期であり、典型的な S 字甕と言える。

D 類(Ⅳ段階)

この時期になると、S字甕はほぼ受容はされなくなる(図 22)。湖北は最後まで受容するようだが、A～D 類まで継続して出土する遺跡はなかった。

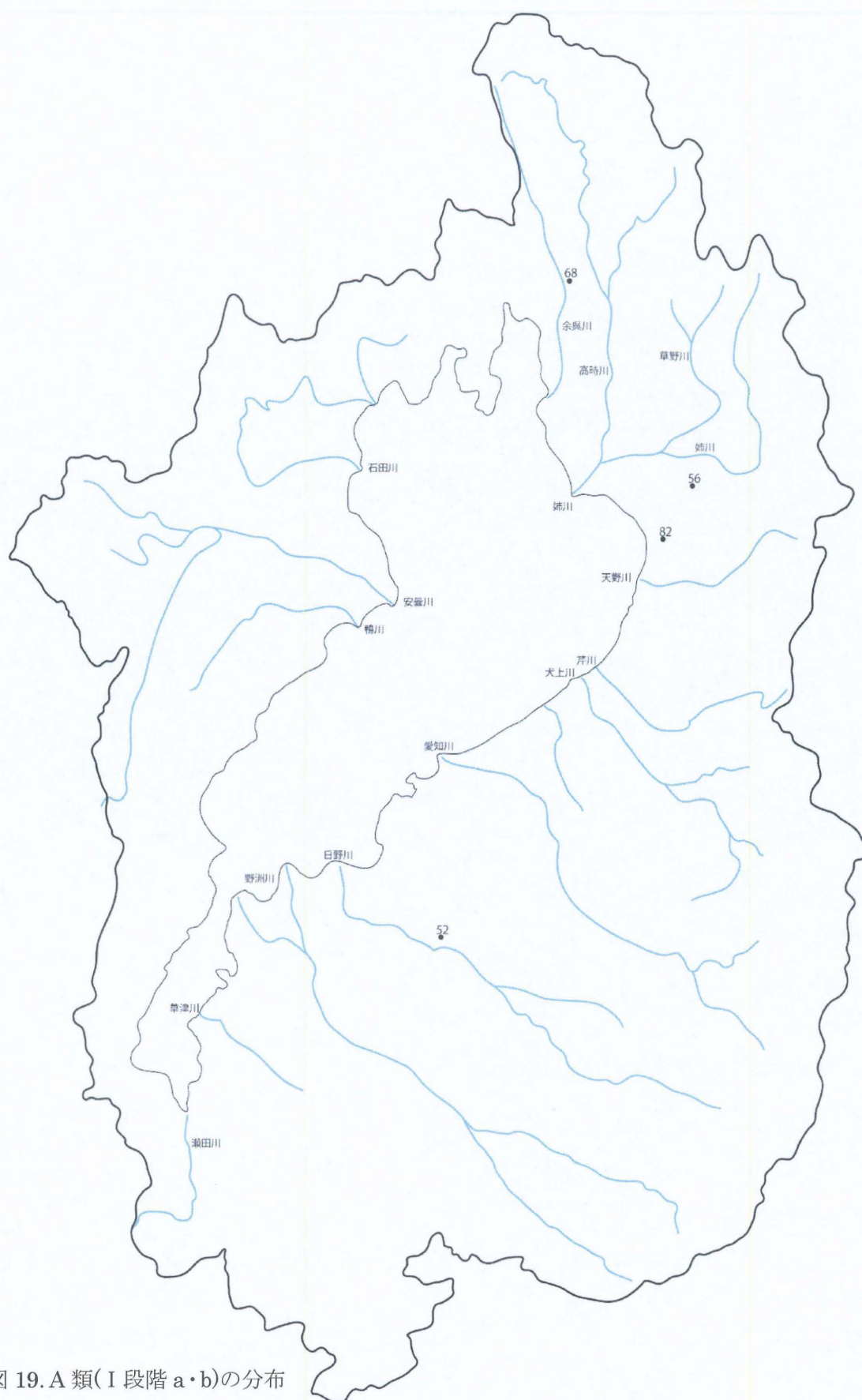


図 19. A 類(I 段階 a・b)の分布



図 20. B 類(Ⅱ段階 a・c)の分布

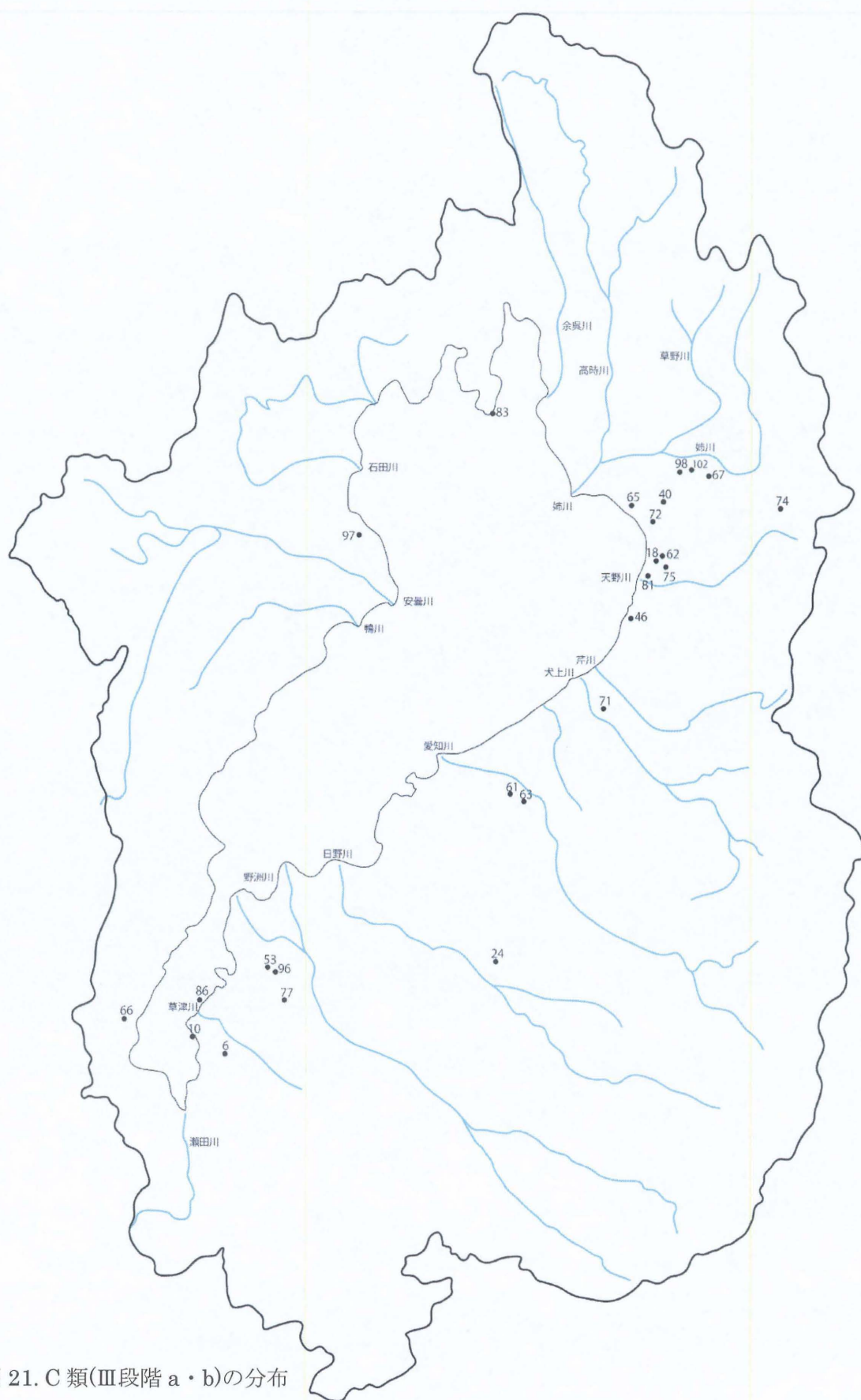


図 21. C 類(Ⅲ段階 a・b)の分布



図 22. D 類(IV段階)の分布

第3章 近江地域における古式土師器甕の割合と推移

第1節 各甕の傾向

受口甕は、生時代中期に近江の野洲川周辺で発生したとされる。その後、弥生時代後期には近江全域へと広がるが、各地域で受容した割合を年代ごとに見ていくと、差が現れた。近江全域で無条件に受口甕を受容したわけではないようだ。また、近江の土師器甕は、大別すると4種ある。このため、受口甕のみに注目したのでは、受容のあり方や位置づけ、交流関係について考えることは難しい。そこで、4種の甕を年代ごとに集計し、各年代における土師器甕の割合やその推移を比較することで、土器交流の様相を復元したい。なお、甕のみで検討できない場合は、補足的に高坏の様相にも言及する。高坏の分類は以下に示すとおりである(図23)。地域ごとの基準資料は、近藤広氏(近藤 2004)と小竹森直子氏(小竹森 1992)が提示したものを参考とした。

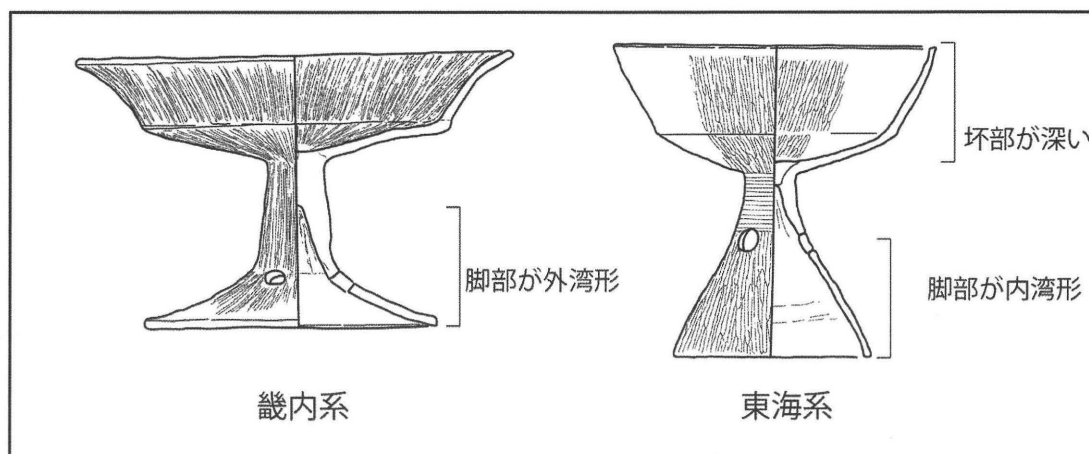


図 23. 高坏の形態分類

a. 弥生時代後期

まず、受口甕が近江全域で見られるようになる弥生時代後期から考察を進めよう(図24)。

湖南は、野洲川流域に所在する服部遺跡(80)SD201 出土遺物、草津川流域の下鈎遺跡(101)C 地区 SR 土器群、琵琶湖を挟んだ対岸の錦織遺跡(20)C 地点出土遺物を基準資料とした。これらは湖南でよく見られるものだが、両遺跡では受口甕が圧倒的に主体を占める。くの字甕も同時期に使用しているが、基本的に受口甕を用いたようだ。有段甕や S 字甕はこの時代には搬入されていないと言える。その後、庄内式併行期・布留式併行期と時期が下っても、湖南では受口甕が継続して主体的な存在でありつづける。

第1章でも述べたが、このことを理由に、これまで湖南は他地域との交流に保守的な地域と考えられてきた。しかし、畿内との交流がなされていないのかというと、そうではない。

服部遺跡では、高坏の主体は畿内系である。当該期の近江は、基本的に東海系と畿内系の高坏を受容していた。その他に美濃西部や山陰からも受容しているが、受口甕のように近江独自の形態をもった高坏は生まれていない。保守的とされた湖南であるが、他の器種では外来系土器も受容しているのであり、この点については、その後の古墳時代前期の動きも含めて考察することにしたい。

次に湖東は、愛知川流域に所在する斗西遺跡(61)SD01の4層以下・SD14・SD66出土遺物を基準資料とした。斗西遺跡は、弥生時代後期から古墳時代の湖東における代表的な集落遺跡である。この遺跡でも、湖南に比べて割合は減るが、受口甕が主体を占める。また、湖南では確認できなかった有段甕が出土しており、この時点で有段甕は湖東まで及んでいたことがわかる。斗西遺跡は、外来系土器を柔軟に受容したらしく、高坏は畿内系・東海系に加え、美濃西部のものも一定の割合で出土する。ただし、これが斗西遺跡のみの特徴なのか、当地域の特徴なのかまでは検討できていない。

湖西は、安曇川流域の正伝寺南遺跡(3)と針江川北遺跡(41)SH1・SK25を基準資料とした。この地域は遺跡が少なく、基本的に安曇川と石田川流域に集中している。受口甕の割合は6割弱で、有段甕が受容され始めるといように、湖東とほぼ同じ様相を示す。

湖北は、北部と南部で特徴が異なる。北部は、余呉川流域に所在する桜内遺跡(69)85SB2を基準資料とした。受口甕が5割と主体をなすが、次いで有段甕が数的に優位な状況にある。これは、日本海側から搬入された有段甕(もしくは工人集団)を受容した窓口が、湖北北部であることを表しており、この後、有段甕は近江内を南下していく。また、1点のみであるが、S字甕が出土していることも注目できる。このS字甕の搬入ルートは湖北南部からであろう。

湖北南部は、天野川流域に所在する法勝寺遺跡(62)を基準資料とした。受口甕やくの字甕、有段甕の割合は近隣の湖東とほぼ同じ傾向だが、S字甕が出土している。おそらく、尾張から美濃を経由してS字甕(もしくは工人集団)を受容した窓口であったと考えられる。その後、湖北北部や湖東に搬出されると予想したが、湖北北部は古墳時代に入ってもS字甕はほとんど受容していない。もっとも、遺跡の調査件数が湖南や湖北南部に比べて少ないため、未発見である可能性も想定される。しかし、ここで取り上げた桜内遺跡や、古墳時代の坂口遺跡(68)は大規模集落であり、余呉川流域の代表的な遺跡と位置づけられる。よって、湖北北部の特徴とみてよいと考える。

当該期は、近江全域で受口甕が主体をなし、日本海や東海の文化が湖北を経て広がりつつある状況と言える。

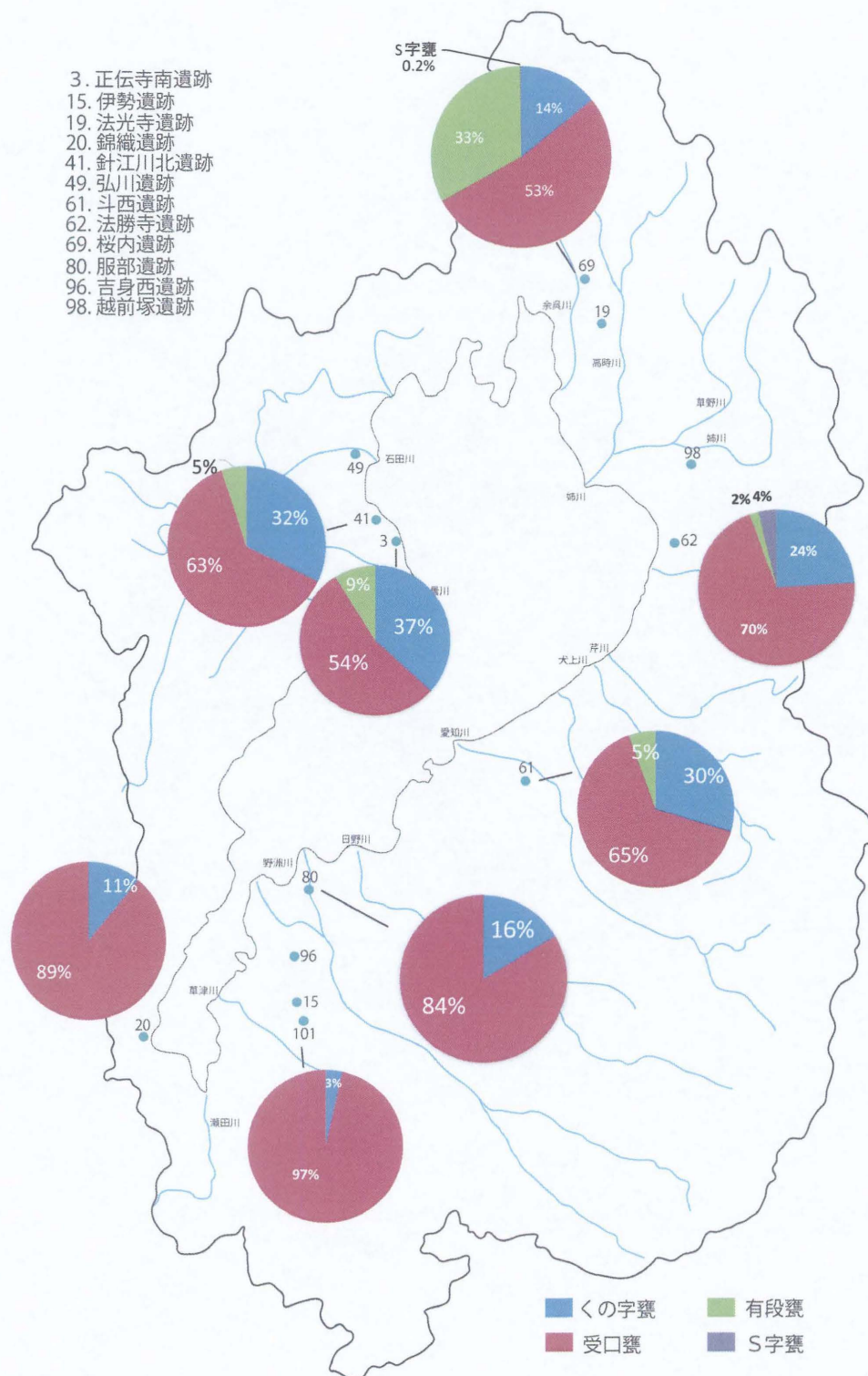


図 24. 弥生時代後期の甕の比率

b. 古墳時代初頭(庄内式併行期)

次に、庄内式併行期の状況を見ていこう(図 25)。ただし、当該期の遺構は近江全域でも少なく、特に湖北の姉川流域では特定が難しいことを初めに断っておく。

まず、湖南では野洲川流域の六条遺跡(17)、草津川流域の柳遺跡(6)T6・T7SX1 下層、その対岸の唐崎遺跡(47)Ⅱ区 T6・T7 を基準資料とした。野洲川流域、草津川流域では弥生時代後期に引き続き、受口甕が主体をなす。しかし、ここでは有段甕と S 字甕を受容した様子が見られる。第 2 章で述べた六条遺跡出土の S 字甕と受口甕との折衷系土器は、底部や胎土が湖北のものである可能性が高かった。また、第 2 章の分布図で見たように、S 字甕初期の型式は湖南からほとんど出土していない。このことから、近江では湖北が S 字甕搬入の窓口であり、湖東を経て湖南、琵琶湖を渡り湖西へと波及していたと考えられる。

庄内式くの字甕も若干ではあるが見受けられ、畿内から伝播した新たな文化も受け入れている。ただし、湖北に限らず近江全域でも明らかな搬入品である細かなタタキ目を持つ庄内式くの字甕は、それほど多いわけではない。これは従来から認められてきた現象だが、理由については解明されていない。黒坂氏らは、弥生Ⅳ・Ⅴ期にも畿内系・東海系くの字甕が細々と存在し、前者が在地で生産されるようになったと考えているようだ(黒坂・沢村 2010)。在地で既にくの字甕を生産していたため、新たに庄内式くの字甕を搬入する必要性がなかったということだろうか。この点に関しては、本研究においても言及できなかった。ただし、弥生時代後期から、畿内の特徴であるタタキ製法以外(主にハケ目)で製作されたくの字甕が存在することは確かである。高坏は、弥生時代後期から引き続き、畿内系が主体を占めている。

一方、対岸の唐崎遺跡では全く異なる様相が認められる。くの字甕と有段甕がともに数적主体を占め、受口甕は 1 割強まで比率が落ち込む。畿内に近いという立地から、庄内式くの字甕が盛んに搬入されたと考えられるが、報告書の実測図のみでは庄内式かどうかの判断で難しい。また、他の湖南の遺跡と比べると、S 字甕の出土量が若干多い。これが、当地域の特徴なのか当遺跡のみの特徴なのかは確定できないが、唐崎遺跡では外来系土器を柔軟に受容していたと言える。

湖東は、斗西遺跡(61)の SD01-8(5 層)・SH01-9(1T5 層・3T5 層)・SD12 を基準資料とした。受口甕の割合が減り、有段甕・S 字甕の外来系土器を多く受容する傾向に変わる。くの字甕 3 割、受口甕約 4 割、有段甕と S 字甕を合わせた外来系土器 3 割というように、各甕をほぼ均等の割合で受容している点が注目できる。

湖西は、森浜遺跡(23)を基準資料とした。当遺跡は立地や遺物の性格から、港と考えられ、湖北南部からの湖上交通の窓口と想定されている。湖西でも、受容の様相は弥生時代と大きく異なる。受口甕の比率が落ち込み、くの字甕が主体となる。これは唐崎遺跡の変化と類似しており、現大津市南部を経て畿内の文化が北上したと考えられる。唐崎遺跡と違うのは有段甕の様相で、弥生時代後期とほとんど変化がない。筆者は、湖北から有段甕もしくは工人集団が南下し、製作技法を伝えていったとみている。先述のように、近江内で出土する有段

甕の胎土は在地のものがほとんどであり、明確な搬入品は極めて少ないと推定されている。加えて、湖北における出土量も考慮すると、在地で作られた可能性が高い。

また、今回の調査では、口縁部の長さが短く、有段甕特有の沈線も見られない、受口甕と区別し難い個体も散見した(図 26)。これは、折衷系や変容系が多い近江の特徴と捉えられる。この点からも、有段甕が在地化している可能性が高いと考える。同じ外来系土師器甕である S 字甕の中にも折衷系は認められたが、有段甕

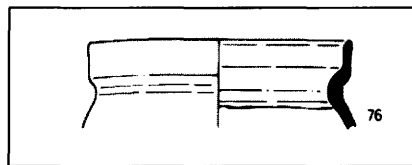


図 26. 受口甕と区別し難い個体
(桜内遺跡)

ほどの割合ではなかった。また、湖西で出土する S 字甕は、現在のところ在地で製作された個体は確認されておらず、全て搬入品と考えられる。ただし、湖西へ東海地方の文化を伝えた可能性の高い湖北南部では、在地の土で製作された S 字甕も存在するため、注意を要する。

以上のような割合や扱われ方からみると、同じ外来系甕でも有段甕の方が S 字甕より、人々の生活に身近な甕として使用されていた可能性が高いと思われる。湖西において弥生時代から古墳時代への移行期に有段甕の割合に変化がなかったのは、一定量生産することが、すでに地域に根づいていたからかもしれない。ただし、甕全体に占める割合は 1 割を下回っており、客体的な存在だったと言える。

湖北では、余呉川流域に所在する坂口遺跡(68)・天野川流域に所在する世継遺跡(81)を基準資料とした。湖北北部の坂口遺跡では、弥生時代後期から様相がほぼ変わらない。現在発掘調査がなされている遺跡としては、坂口遺跡と桜内遺跡が県内最北域となる。くの字甕が湖南から北上する動きは当該期でかなり活発となるが、湖北北部までは到達しなかったか、もしくは当地域が受容しなかったようだ。同様に、S 字甕が湖北南部から南下する動きも活発だが、北上はしないか、もしくは受容しなかったらしい。

ここで高坏に注目したい。坂口遺跡の高坏は、ほとんどが東海系である。脚部や坏部が欠損して判別できないものはカウントしていないため、断言はできないが、高坏に関しては東海からの搬入品を主体的に受容したと言える。この点からみると、湖北南部から北部へ S 字甕が北上しなかったのではなく、湖北北部が S 字甕を受容しなかった可能性が高い。その背景や交易の仕方までは明らかでないが、器種によって交易相手を選択しているのだろうか。なお、これにつづく布留式併行期の良好な遺構がなかったため、最北域の検討は以上に留まる。今後の資料の充実を待ちたい。

次に湖北南部では、くの字甕が主体となる。また、S 字甕の搬入(もしくはその製作工人の移動)もより活発化し、柔軟に受容するようになる。他の地域と比較すると S 字甕の比率が高いことから、やはり当地域が S 字甕の窓口だった可能性が高い。世継遺跡では高坏の出土数が少なく検討できなかったが、姉川流域から天野川流域間では高坏は東海系のものが主体となっており、甕の割合とは逆の結果を示す。当地域は他地域に比べ、S 字甕が多く出土しているものの、あくまで客体的存在であり、主体をなすのは、くの字甕である。

当該期は、近江内で土器交流が盛んに行われ、各地域で主体となる土器に差が見られた。現在の天津市南部や湖西地域では、畿内の影響かくの字甕や畿内系の高坏が主体となりつつあった。野洲川・草津川流域の湖南と湖北北部では弥生時代後期と変わらず、受口甕が主体である。そして、湖北南部と湖東ではくの字甕が盛行しつつあったと言える。

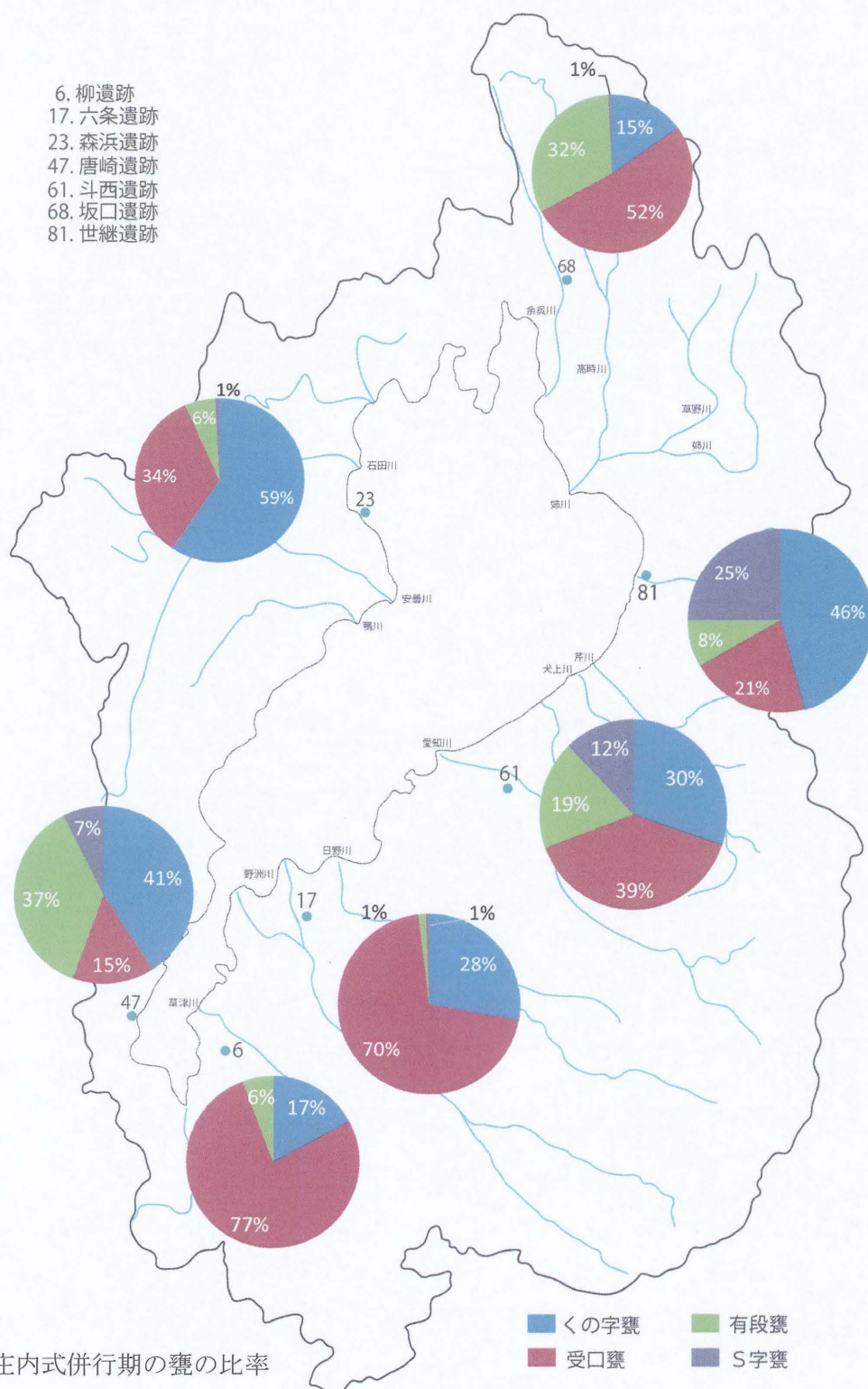


図 25. 庄内式併行期の甕の比率

c. 古墳時代前期(布留式併行期)

最後に、布留式併行期の状況を見ていこう(図 27)。

湖南では、野洲川流域に所在する石田三宅遺跡(53)SD30Ⅱ層、草津川流域に所在する柳遺跡(6)、対岸の滋賀里遺跡(66)Ⅳ区竪穴住居址群出土土器を基準資料とした。野洲川流域では、一貫して受口甕が主体を占めている。弥生時代後期から古墳時代前期までの間、甕に関して構成比率が変動しなかったのは野洲川流域の遺跡群のみである。高坏も弥生時代後期から変わらず、畿内系が主体を占める。草津川流域も同様に受口甕を主体とするが、比率が野洲川流域と比較すると低くなり、外来系の甕も一定量使用し続ける様相が認められた。

一方、対岸の滋賀里遺跡の様相は全く違い、布留式く字甕が主体となる。庄内式併行期に盛行していた有段甕も、この時期には落ち着き、他地域と類似した客体的な存在となる。S字甕の比率は庄内式併行期から変わらず、一定量の受容があったようだ。湖南の中でも、現在の大津市南部は畿内に最も近く、文化が流入しやすい立地のため、このような結果となったのだろう。高坏も畿内系が主体である。

湖東は、愛知川流域に所在する芝原遺跡(60)E2 地区出土土器群を基準資料とした。主体が受口甕からく字甕へと変わり、外来系の甕も少量となる。これは、他地域と類似した結果であり、当該期の近江全域(湖南は除く)で見られる傾向のようだ。ただし、これは甕に限ったことであり、高坏の様相は異なる。湖東では、畿内系もあるが東海系が主体であり、湖西では畿内系が主体である。甕のみの動きを見ると、弥生時代から古墳時代へ移り変わる際に畿内の権力が入ってきたため、主体がく字甕に変わっていったと考えていた。しかし、器種によって受容する地域が異なるということは、受け入れる側が交易相手を選択していた可能性がある。とすれば、土器交流の背景に権力が関係しているとは限らないのかもしれない。

湖西は、庄内式併行期から続く港である森浜遺跡(23)を基準資料とした。布留式併行期になっても大きく変わることはなく、布留式く字甕が主体であり、外来系土器も一定量存在した。高坏も畿内系が主体であり、当地域が庄内式併行期から甕と高坏において、畿内の影響を主体的に受容していることがわかる。

湖北は、姉川流域に所在する国友遺跡(99)MⅢ、鴨田遺跡(40)溝 A 出土土器群を基準資料とした。ただし、湖北では当該期の一括資料が少なく、庄内式併行期から布留式併行期まで存続する遺構から抽出している。また、両遺跡とも湖北南部の範疇に含まれ、湖北北部からは当該期の良好な遺構や一括資料を抽出できなかった。

国友遺跡は、庄内式・布留式く字甕が主体で、外来系の甕は極めて少ない。注意しなければならないのは、台付甕の脚部が多量に出土していることである。東海では、弥生時代後期に平底甕から台付甕へ主流が変わる。台付く字甕や台付受口甕もその流れの中で生まれ、近江では庄内式併行期から布留式併行期初頭の限られた期間、台付甕が盛行する。ただし、近江の台付く字甕や受口甕が、東海の影響で生まれたかは、未だ明確にはなっていない。国友遺跡では、S字甕はほとんど見られず、高坏も東海系や美濃西部の型式はあるが、

畿内系が主体である。一方、鴨田遺跡では庄内式・布留式くの字甕が主体ではあるが、外来系土器も多く出土する。高坏も東海系が主体を占め、国友遺跡とは異なる様相を示している。台付甕は国友遺跡と同様、多量に出土しており、くの字甕の型式も含めて、両遺跡に大きな時期差は見られない。このことから、地域単位で土器交流の対象を選択していたのではなく、遺跡単位で行われていた可能性が考えられる。

当該期の近江を概観すると、野洲川・草津川流域の湖南を除き、全域でくの字甕が主体となった。外来系土器の受容にも大きな差は見られなくなり、各地域で一定の割合となる。以下、全体を大まかにまとめておこう。

湖南では弥生時代後期から古墳時代前期まで一貫して受口甕を主体的に使用し、くの字甕や他の外来系甕はあまり受け入れていない。特に野洲川周辺地域ではその傾向が顕著に見られる。しかし、高坏は畿内系を主体としており、器種によって受容を選択していた可能性がうかがえる。

湖東は、弥生時代後期から庄内式併行期までは受口甕を主体としていたが、布留式併行期に入ると、くの字甕へと主体が変わる。外来系土器を柔軟に受容し、高坏も畿内系や東海系、美濃西部や山陰など多様であったが、主体をなすのは東海系である。これは、くの字甕が主体となった布留式併行期でも同様であった。

湖西は、弥生時代後期では受口甕を主体としていたが、古墳時代に入ると、すぐにくの字甕へと主体が変わる。高坏も畿内系のものが主体を占め、器種による相違は見られなかった。

湖北では、弥生時代後期から古墳時代前期に移るにつれて、受口甕からくの字甕へと受容する主体が変化していく。東海との交流は、近江の中では湖北が最も盛んで、特に湖北南部では東海系土器が継続的に出土するほか、脚台の付く受口甕・くの字甕も見受けられる。さらに、国友遺跡と鴨田遺跡のような例はあるものの、湖北全体としては、高坏も東海系のものが主体をなしていた。

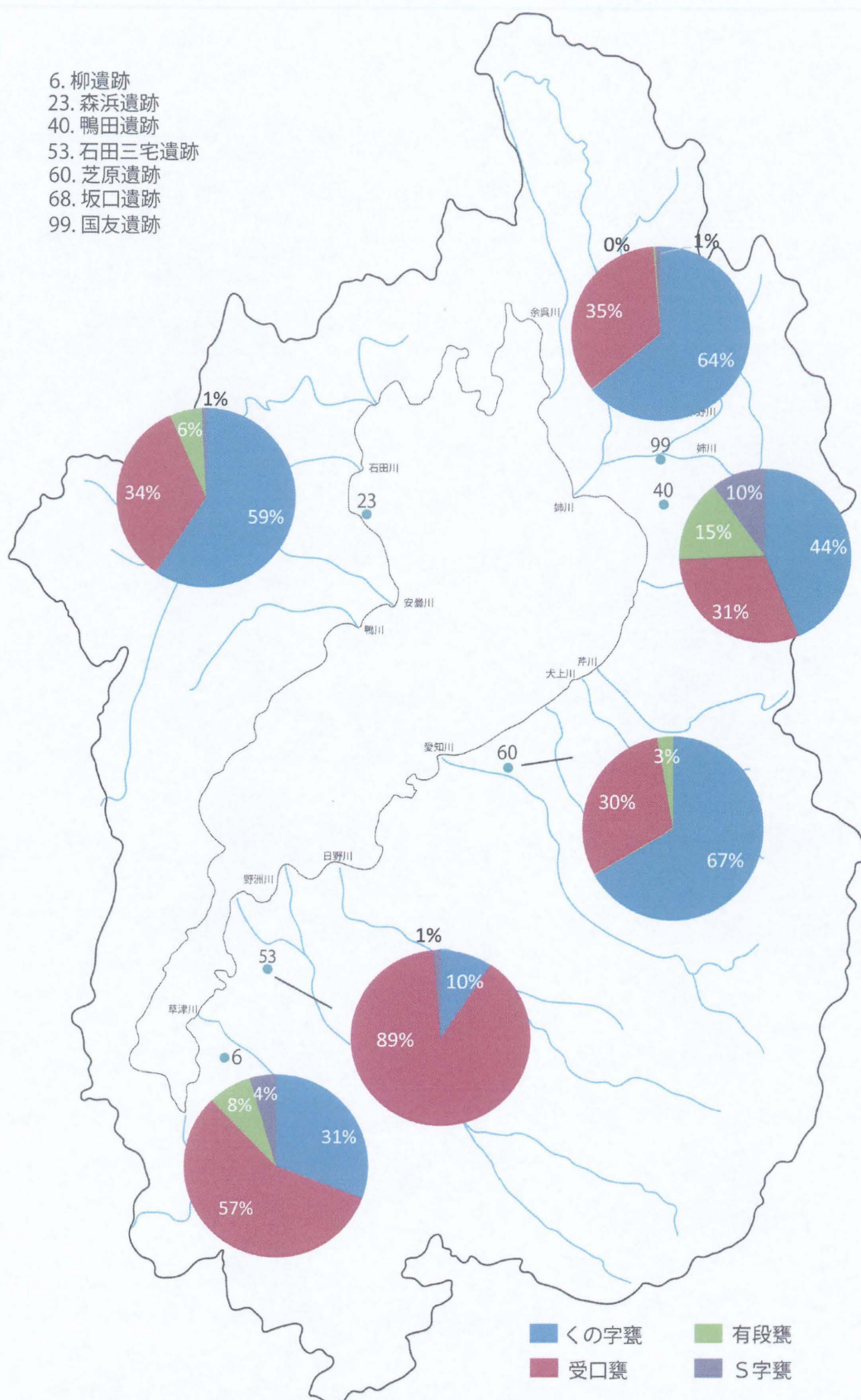


図 27. 布留式併行期の甕の比率

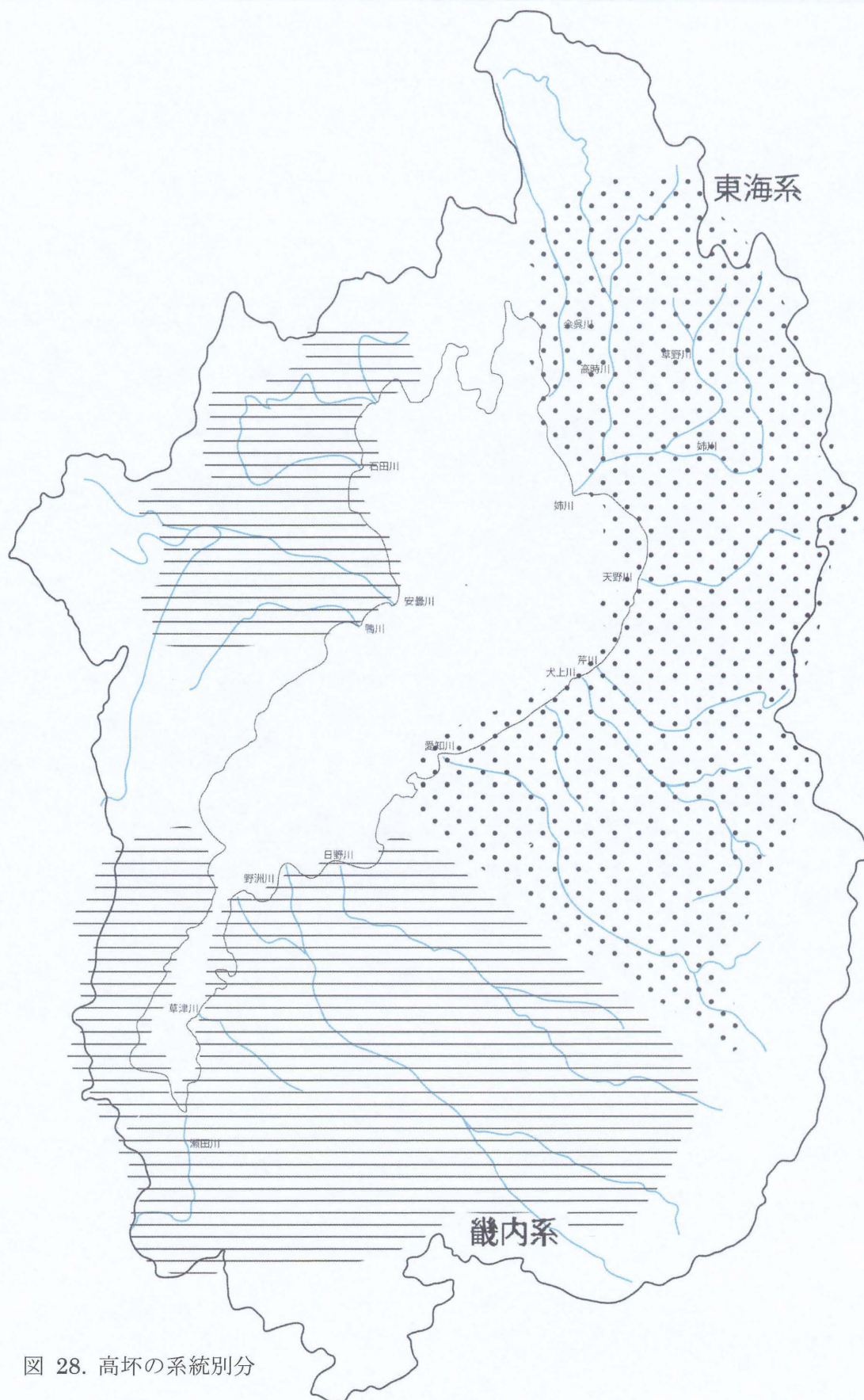


図 28. 高坪の系統別分

第2節 伊賀地域との比較

これまで、近江の古式土師器の様相を述べてきたが、本節では交流が深いとされてきた伊賀との比較を試みる。型式変化という視点からのみでなく、近江と伊賀との交流の実態をより明確にするためである。

しかし、伊賀については、従来も指摘されてきたことだが、良好な一括資料がないことが問題となる。そこで、近江に比べると資料数は少ないが、現状で議論できる限りの資料と、個体レベルの検討をおこなう。地域ごとの基準資料は、石井智大氏(石井 2010)が提示したものを参考とする。また、近江のように時期による変化をたどることができる遺構がほとんどないため、弥生時代後期から古墳時代前期までを一括して甕の割合を算出した。細かな時期の変遷を明らかにするには、今後の資料の充実を待つ必要がある。

a. 弥生時代後期～古墳時代前期

伊賀全域としては、くの字甕が主体を占めている。ただし、伊賀北部では受口甕も同様に多く見られた。南部に行くにつれて、受口甕の出土量は少なくなる傾向がある(図 29)。

北部では、小芝遺跡(6)大溝、北門遺跡(55)SD21・SK02を基準資料とした。2章で提示した編年案で用いたのは、小芝遺跡の受口甕であり、多様な口縁部形態と施文が見られる。この大溝は、弥生時代後期から古墳時代前期(布留式併行期)まで存続する。報告書では、伊賀北部が湖南と交流していた可能性を想定するが、全形がわかる資料は少なく、湖南的な様相を持つ甕か判断できなかった。また、受口甕は確かに他地域と比較すると多いものの、主体はくの字甕であり、畿内的様相も濃厚である。高坏は、甕とは逆に、ほぼ東海系であった。これは、受口甕を主体として畿内系高坏を受容していた湖南地域とは逆の様相を示す。

北門遺跡では庄内式併行期の土器が多く出土している。くの字甕と受口甕がほぼ同数あり、外来系土器は出土していない。ここでも全形がわかる資料は少ないが、口縁部から体部下半まで判明する個体はあった。それによって、ほぼ湖北的な受口甕の様相を持つと判断できる。高坏は小芝遺跡同様、東海系がほとんどを占める。注意したいのは、庄内式併行期にはS字甕は既に確立していたにもかかわらず、北門遺跡では受容していない点である。

筆者は昨年、伊賀北部からはS字甕の最盛期以降の型式がほとんど出土しないことを発見し、伊賀北部がなんらかの理由により、途中でS字甕を受容しなくなった可能性を示唆した。しかし、高坏は東海系のものを受容していたのであれば、近江同様、器種によって交易相手を選択していたのだろうか。この点を考えるために、他の地域も見てみよう。

中部では、高賀遺跡(40)A区大溝、沢代遺跡(47)を基準資料とした。高賀遺跡からは庄内式併行期の土器が多く出土しているが、同溝には古墳時代中期のものも含まれ、遺構の存続期間が長かったことがわかる。しかし、布留式併行期の土器は少なく、主に機能した時期は庄内式併行期と古墳時代中期とみられる。この遺跡では、くの字甕が主体をなす。出土した受口甕は湖北的特徴を持ち、伊賀北部と同様の状況を示す。しかし、北部とは逆に、高坏は

畿内系が主体を占めており、東海系は少ない。同溝からは、伊勢型二重口縁壺やヒサゴ壺などの東海系土器も多く見受けられたが、全体的には畿内系のものが主体である。

木津川を挟んだ対岸の沢代遺跡でも、くの字甕が主体であった。庄内式併行期から布留式併行期にかけての土器が多く出土し、受口甕の口縁形態には、近江で見られる典型的なものではないものもある。報告書はそれらを「S字甕亜流」とするが、表面の調整が明らかでなく、また全形がわかる個体もないため、慎重を期したい。他の遺跡よりもS字甕が多く出土しているのは、伊勢から畿内へ向かうルート上に位置するからだろうか。しかし、高坪は畿内系が多く、あくまで主体は畿内系土器であったらしい。

南部では、蔵持黒田遺跡(57)と坂之上遺跡(63)を基準資料とした。蔵持黒田遺跡は、伊賀における弥生時代後期の代表的な集落遺跡であり、同時代終末期までの短期間存続したと考えられている。立地が畿内の近くであることから、出土する土器も畿内系のものがほとんどを占める。受口甕の外表面調整にはタタキ・ハケ・ナデの三手法が見られ、タタキで仕上げる手法は受口甕とくの字甕との折衷系と言える。受口甕が湖北的な特徴を持つかは判断できなかった。高坪は、東海系も見られるが、畿内系が圧倒的に主体をなす。S字甕は見られず、伊賀北部と南部ではS字甕の搬入に時間差があったことを示していると思われる。これは、北部ではS字甕初期から最盛期の型式が多く、南部では最盛期から終末期の型式が多く出土する、という筆者の昨年の研究成果とも矛盾しない。

坂之上遺跡でも、くの字甕が主体をなし、主に布留式併行期の土器が多く出土している。受口甕はわずかししか出土せず、全形のわかる資料もなかったため、地域の特徴までは見出せなかった。同時期の沢代遺跡と合わせて見ると、S字甕はこの時期には確実に南部に波及していたようである。高坪は、東海系もあるが、畿内系が圧倒的に主体で、蔵持黒田遺跡と同様の状況を示す。

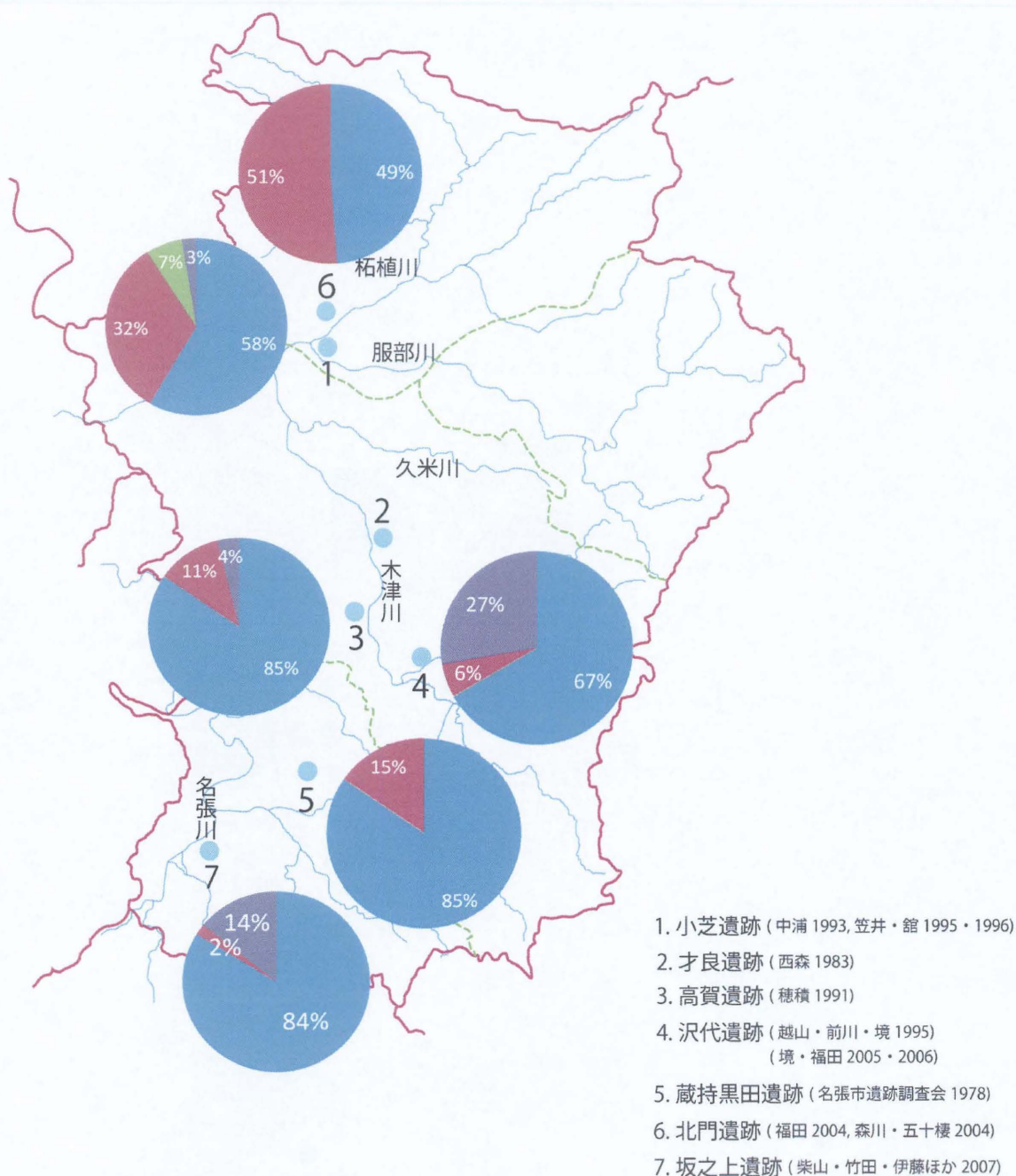


図 29. 伊賀地域における甕形土器の割合

b. 個体の検討

概観すると、伊賀北部は受口甕が多く、高坏は東海系のものが主体をなす。一方、中部と南部はくの字甕が多く、高坏は畿内系のものが主体であった。また、北部だけでなく伊賀で出土する受口甕は、湖北的な特徴を持つものが多いようだ。なお、近江周辺地域で出土する受口甕は、湖東を含む湖北的な特徴を持つものが多いという研究結果がある(近藤 2002、2004)。これは日本海沿岸地域や大和を対象としているため、伊賀・伊勢の資料はほとんど

検討されておらず、本研究で伊賀の受口甕の様相が明らかとなったことは新たな成果である。全形のわかる個体があまり出土していないため、多くは検討できないが、以下、特徴的な個体について述べる。

高賀遺跡(地図中番号 40)

A 区大溝出土の資料番号 51(図 30)は、同報告書では受口甕と分類されるが、早野浩二氏は、S 字甕に直結する型式ではないものの「広義の S 字甕 0 類」の可能性があると述べている(早野 1996)。筆者も、昨年の研究では早野氏の意見にほぼ同意していたが、近江各地域の受口甕を調査した結果、湖北的な特徴を持つ個体の可能性が高いと判断するにいたった。体部外面のハケ目が不定方向であり、体部上半上位部分に弧状のハケ目が見られる。また、底部が円盤状になっている等、調整技法や施文に湖北の様相が認められるからである。

もちろん、初現的な S 字甕である可能性も残っており、今後、当地域における資料の充実を待って再度考えてみたい個体である。

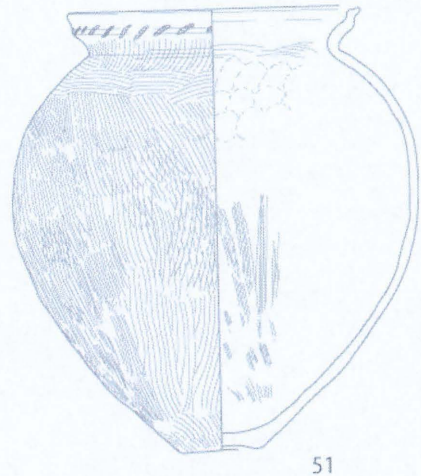


図 30. 高賀遺跡の受口

才良遺跡(地図中番号 17)

甕の出土量が少なく、比率は算出しがたいが、A 区 SD1 から出土した資料番号 60 が、「近江に近い甕」として報告されている(図 31)。体部外面の調整は不明ながら、体部上半上位に施文があり、底部が円盤状となっているため、湖北的と判断した。ただし、SD4 からは湖南の特徴を持つ受口甕も出土している。資料番号 34 は、体部上半上位から下位にかけて施文が描かれ、加飾的な湖南の特徴が表れている。才良遺跡の受口甕は全体的に湖北的なものが多く、湖南的なものは極めて少ないが、全く存在しなかったわけではないようだ。

高坏は畿内系が主体であり、遺跡全体としても畿内的様相が強く認められ、S 字甕は出土していない。遺構の時期は弥生時代後期とされている。この時期は、まだ木津川沿いに S 字甕は波及していなかったと思われる。

伊賀では全形のわかる資料が少なく、あまり検討できていないが、伊賀北部と中部で出土する受口甕は湖北の特徴を持つ

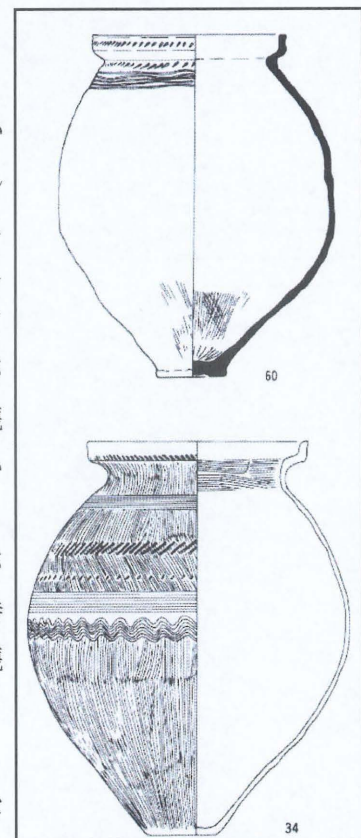


図 31. 才良遺跡の受口

ものが多いように思われる。とすれば、従来指摘されてきた伊賀北部と湖南との交流という形ではなく、湖北から工人が南下し、湖南の技術も含めて伊賀へ伝承したのかもしれない。ただ、伊賀南部では受口甕の出土量が少なく、また全形の分かる良好な資料もなかったため、検討できなかった。

以上の分析結果を踏まえ、次章で近江と伊賀との交流についてまとめることにしたい。

第4章 交流の様相とルート

第1節 近江地域

これまでに得られた結果から、まずは近江内の交流を考察しよう。

受口甕は、弥生時代中期頃に湖南の野洲川流域で発生し、その後、湖北へと広がった。湖北では、弥生時代後期頃からこれが主体的に使用され、地域の特徴を持つ独自の受口甕も生まれた。一方で、湖北は他地域からの甕も受け入れた。有段甕をはじめとする日本海沿岸地域、台付甕をはじめとする東海、くの字甕をはじめとする畿内の土器文化である(図32)。そして、近江は、受容したこれら多様な外来系文化を「折衷する」ことにより、独自の文化を生み出した。

また、そうした外来系土器を受け入れる一方、受口甕を日本海沿岸地域や東海、畿内へと波及させていくが、この役割を担った可能性が高い地域が湖北である。前章でも述べたが、近藤広氏の研究によると、日本海沿岸地域や尾張、大和から出土する受口甕には、湖東を含む湖北の特徴を持つものが主に見られる(近藤2002、2004)。そして、今回、伊賀で出土する受口甕も湖北の特徴を持つものが主体であることがわかった。これらの結果から、受口甕の波及は湖北の工人集団が担ったと考えられる。近江の中でも、特に湖北は、自分たちの文化を外へ発信する力を持った地域であったと推測される。

湖北は、弥生時代後期から古墳時代前期になると、受容する甕が受口甕からくの字甕へと変化する。時代の移り変わりとともに、畿内の影響を強く受け始めた感があるが、高坏は東海系を受容していた。つまり、器種によって受け入れる地域を選択していた可能性がある。こうした甕と高坏との相違は、近江の他の地域でも認められた。

それに対して、湖南では、弥生時代後期から古墳時代前期まで一貫して受口甕を使用する。ただし、自分たちの生み出した文化を重視して、他の地域からは土器を受容しなかったのではなく、高坏は畿内系を受容している。また、東海系の土器を全く受け入れなかったわけではなく、S字甕やパレススタイルの壺なども少量ながら出土している。

これらの搬入ルートは、第2章で述べたように、湖北からの経由である可能性が高い。一方、受口甕は伊賀北部や亀山地域を通り、伊勢へ波及している。つまり、早い段階から湖南と伊賀北部をつなぐ道は存在したはずである。とすれば、湖南に東海系土器を搬入する場合、最短のルートは伊勢から伊賀北部を経由するものであろう。ところが、その道は使われなかった。これがなぜなのかが大きな問題となる。

このような状況を生じた背景は二つ考えられる。一つは、湖南と伊賀の交流は双方向のものではなく、近江から文化を一方向的に伝えた可能性である。もう一つは、双方向の交流を図ったものの、湖南が拒否した可能性である。他地域へ土器を波及させたのが湖北であったとすると、湖南はあまり外交的ではなかったのかもしれない。もっとも、高坏は他地域のもの

を受け入れているため断言はできないが、甕に関して外部の文化を受け入れなかったのは事実である。他地域がくの字甕へ主体が変わっていく中、湖南では明確な意志を持って受口甕を使い続けたと言えるのではないだろうか。

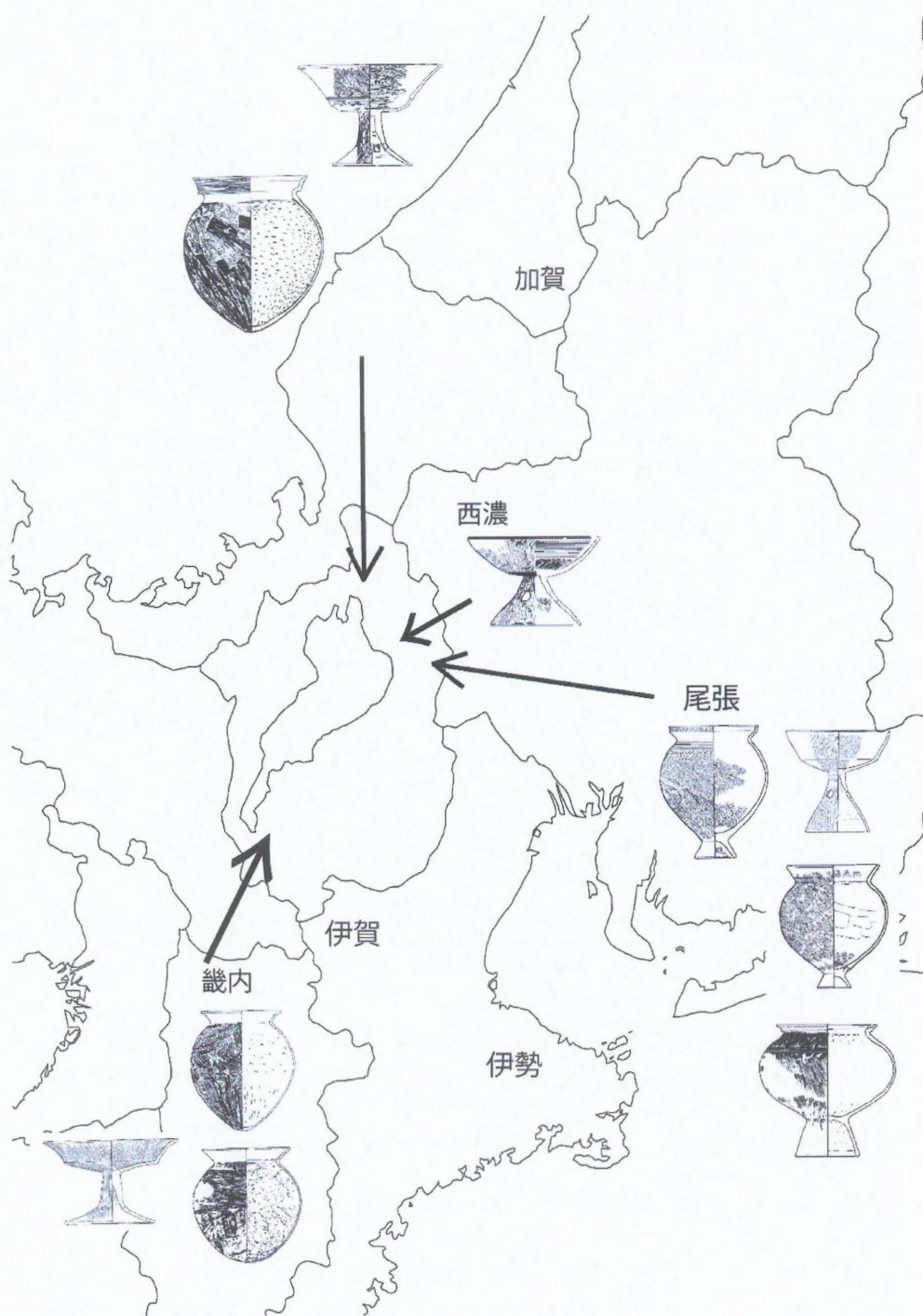


図 32. 近江への外来系土器の搬入



図 33. 湖北的な特徴を持つ受口甕の近江からの搬出ルート

第2節 伊賀地域

次に、伊賀内部での交流について考察する。

搬入された受口甕は湖北的な特徴を持つものであったが、位置関係から考えると、野洲川流域の湖南を経て搬入されたのだろう(図 33)。そのため、湖南的な特徴を持つ受口甕も少量ながら見受けられる。湖南の工人が湖北の工人とともに移動したのか、湖北の工人が湖南の技術を含めて波及させたのかまではわからないため、ここでは事実だけを述べておく。

さて、現状では、伊賀から湖南へという交流はなされていなかった可能性が高いが、伊賀から見ても同様であろうか。

伊賀北部では初現的型式の S 字甕が出土しており、受口甕から S 字甕へ変化し始めた地域である可能性が高いことは、これまで述べてきたとおりである。出土する受口甕の型式は、近江最終形態以外、ほぼ全型式を網羅できるため、継続的に受容していたと考えられる。しかし、受口甕を若干上回る数のくの字甕が出土しており、甕においては近江と畿内の影響が拮抗した状況を示す。一方、高坏は東海系を使用している。伊賀北部と伊勢湾沿岸地域とをつなぐ道は、弥生時代中期から存在したとされており(森岡 1996)、高坏に関しては早くから伊勢のものを取り入れていたのだろう。当該期には、確実に伊賀北部までは東海の影響が届いていたと言える。

しかし、湖南は、継続的に文化を発信し、伊賀と結ぶ道も確実に存在したにもかかわらず、これほど近隣でありながら、伊賀から東海の文化を取り入れることはなかった。やはり、湖南は外交を好まない地域だった可能性が高いのではないか。

とはいえ、伊賀北部が必ずしも柔軟に他地域の土器を受容していたわけではない。今回も、伊賀北部からは S 字甕の最終段階の型式は見出せなかった。つまり、S 字甕を受け入れはしたが、最終的に受容をとりやめてしまうのである。高坏の様相から考えても、東海との交流を停止したのではないことは明らかだが、なぜ S 字甕を受容しなくなってしまったのか。

この点については想像の域を出ないが、権力や勢力とは関係なく、地域の人々が主体的な意志を持って、器種ごとに交易対象を選択していたとすれば、S 字甕が北部の人々には合わなかったのかもしれない。そうではなく、畿内からの勢力に迫られた結果だとすれば、伊賀南部のように、くの字甕や畿内系高坏が圧倒的に主体を占めるはずだからである。立証は簡単でないが、他の器種との比較を進めることによって、もう少し詳細な検討ができる可能性はあり、今後の研究課題としたい。

また、伊賀中部から出土する受口甕にも湖北的な様相が認められることから、これらは伊賀北部へ伝わった後、木津川沿いに南下したものと推定される。ただし、伊賀中部や南部は、北部ほど多く受口甕を受容することはなかった。おそらく、既に畿内との交流が盛んに行われ、くの字甕が定着していたためであろう。高坏も同様に畿内系が主体である。

伊賀は、基本的には近江・畿内・伊勢の三地域と交流をしていたが、近江のように独自の文化を他地域へ発信した様子はあまり見受けられない。特に南部は、伊勢から S 字甕を畿

内へ、畿内からくの字甕を伊勢へというように、両地域を結ぶ交流の結節点・通過点という性格が強い。第3章で見たように、S字甕は南部の中でも伊勢に近い地点の遺跡から多く出土し、畿内に近い地点では出土量が減る。これは、近隣地域の外来系文化を拒むことなく受け入れていることを示すものだろう。

このような南部に比べると、北部はかなり明確な意志を持って交流していたように思われる。また、初現的なS字甕の型式を生み出したことは、伊賀での甕の製作における唯一の独自性と言える。湖南と同様、伊賀北部の人々は、自らの生み出した文化を大切にしたいがために、S字甕の受容をとりやめたのかもしれない。いずれにせよ、この点をさらに検討するには、多器種との比較に加えて、今後の資料の充実を待つ必要がある。

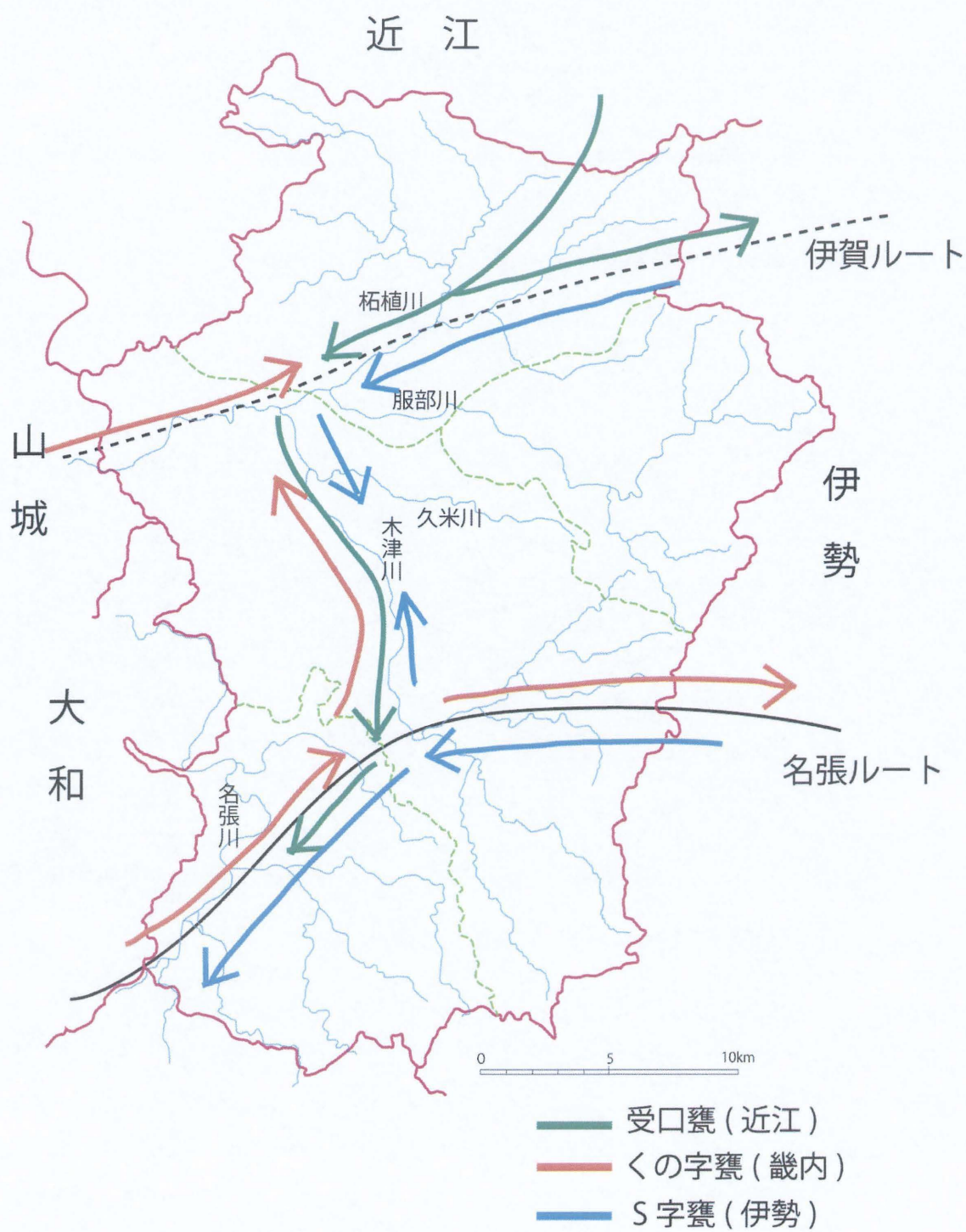


図 34.伊賀内部での鵺の動き

おわりに

本研究には、大きく二つの目的があった。一つは、S字甕の初現が伊賀であるのかを明確にすること、もう一つは、近江・伊賀における古式土師器の甕の波及状況を明らかにすることである。そこで、伊賀の資料を使用した受口甕からS字甕への型式変化を当てはめ、近江における型式ごとの分布図を作成し、初現が伊賀であることを確認した。次に、近江・伊賀で出土する甕を4種に大別し、地域・時代ごとの比率を比較した。その結果、近江内部での地域間交流と、外部との交流のあり方を、以下のとおり明らかにできた。

湖北は、余呉川流域が日本海沿岸から有段甕を受け入れた窓口で、有段甕の比率は弥生時代後期から庄内式併行期まで近江最多であった。その後、時代が下るにつれて、有段甕の製作技術は南へ伝えられていく。姉川流域及び天野川流域は、尾張・美濃からS字甕を受け入れた窓口で、S字甕が弥生時代後期から布留式併行期まで近江最多の割合を占める。これも有段甕同様、その後は南へ波及していく。ただし、両地域でも主体をなすのはくの字甕であり、外来系甕はあくまで客体的な存在であった。

湖西は、湖北南部からの湖上交通により、S字甕が搬入された。くの字甕が主体で、畿内から北上する道がこの時代には確立していたことが確認できる。

湖東は、湖北から南下してきた有段甕とS字甕を柔軟に受容した。湖北から南下する道が存在したことが読み取れる。一方、主体となるのはくの字甕のため、畿内から湖南を通して北上する道も同様に確立していたと言える。

湖南は、弥生時代後期から布留式併行期まで一貫して受口甕を使用した。くの字甕やその他の外来系の甕も受容はするが、少量である。S字甕の搬入経路は、最短ルートである伊勢から伊賀を経由する道は使わず、湖北から南下するルートで受け入れている。これまでは、伊賀との交流が想定されてきたが、双方向の交流ではなく、湖南からの一方的交流であった可能性が高いことがわかった。

本研究では、従来課題とされてきた近江と伊賀の古式土師器の動きを明らかにすることができた。また、高坏と甕では受容した系統に相違があることも判明し、地域間交流のあり方に新たな視点を提示することができた。一方、伊賀北部がS字甕の受容を途中で停止した理由等、未解明の問題も多い。近江と伊賀における古式土師器の研究は始まったばかりであり、本稿が今後の研究の進展につながれば幸いである。

本論をまとめるにあたり、つたない文章をいつも温かくご指導いただいた、三重大学大学院の小澤毅先生、山中章先生に深く感謝申し上げます。また、研究をいつも見守り、時には相談にものってください三重大学考古学研究室の皆様にも感謝いたします。

本研究の資料調査に際して、滋賀県教育委員会、滋賀県立安土城考古博物館、長浜市教育委員会、伊賀市教育委員会の各機関に便宜を図っていただき、各機関の皆様には温かいご教示とご指導を賜りました。末筆ではありますが、謹んで御礼申し上げます。

表 1. 受口甕出土遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	①	②	③	④	⑤	⑥	仮A段階(0)	I 段階a(A)	I 段階b(A)	II 段階a(B)	II 段階c(B)	III 段階a(C)	III 段階b(C)	IV 段階(D)	参考文献
1	虫生遺跡	野洲市				●											徳網克己(2004)
2	熊野本古墳群 I	高島市			●												宮崎雅充(2003)
3	正伝寺南遺跡	高島市	●	●	●	●											宮崎雅充(2003)
4	吉武城遺跡	高島市			●	●											①宮崎雅充(2004)
5	中畑遺跡	草津市	●										●				②清水尚・大崎哲人ほか(1993)
			●	●		●	●										①岡田雅人・松田拓也(2014)
6	柳遺跡	草津市	●	●	●	●	●										②藤居朗・小宮猛幸(2004)
					●	●	●										③小宮猛幸(2003)
7	西海道遺跡	草津市	●	●	●										●		①岡田雅人(2008)
8	模遺跡	草津市		●	●	●	●										②岡田雅人(2007)
9	御倉遺跡	草津市	●	●	●	●	●										③平井美典ほか(2008)
10	北萱遺跡	草津市		●	●	●	●										藤居朗・山元祐人(2008)
11	山田町遺跡	守山市	●	●								●		●			①小宮猛幸(2000)
12	下之郷遺跡	守山市															②藤居朗(2005)
13	谷遺跡	草津市	●	●													藤居朗・谷口智樹(2006)
14	欲賀南遺跡	守山市					●										小竹森直子・吉川昌信・植田弥生(2013)
15	伊勢遺跡	守山市					●										木下義信(2013)
				●													川畑和弘(2014)
16	下長遺跡	守山市	●	●	●	●	●										藤居朗(2001)
17	六条遺跡	野洲市	●	●	●	●	●										山川芳志郎(2009)
18	奥松戸遺跡	米原市		●	●	●	●										畑本政美・伴野幸一・川畑和弘(2008)
19	法光寺遺跡	伊香郡	●	●													伴野幸一(2009)
20	錦織遺跡	大津市		●	●	●											伴野幸一(2008)
21	堂田遺跡	東近江市			●	●											岩崎茂・村尾政人ほか(2008)
22	富波古墳	野洲市				●											岩崎茂・小島睦夫(1993)
23	森浜遺跡	高島市		●	●	●	●										遠酒豊・濱修(1990)
24	蛭子田遺跡	東近江市			●	●	●						●				吉田秀則(1989)
25	多景島遺跡	彦根市		●	●									●			横田洋三(2000)
26	浅小井(高木)遺跡	近江八幡市				●											松沢修・稲垣正弘・細川修平(1990)
27	勸学院遺跡	近江八幡市			●	●	●										宮崎幹也(1988)
28	針氏城遺跡	湖南市				●	●										宮崎幹也・仲川靖(1986)
29	関津遺跡	大津市		●													大崎康文(2012)
30	肥田西遺跡	彦根市		●	●												①藤崎高志ほか(2010)
31	十里遺跡	野洲市	●	●	●	●	●										②藤崎高志(2009)
32	弘前遺跡	守山市			●												堀真入ほか(2010)
			●														北原治ほか(2010)
33	南小足遺跡	長浜市	●	●													吉田秀則(2009)
34	加茂遺跡	近江八幡市		●	●	●											吉田秀則(2008)
35	大東遺跡	長浜市		●													松室孝樹(1994)

36	八反田・中町田遺跡	長浜市	●	●			●										北村圭弘・吉田秀則・三輪晃三(1994)
37	妙楽寺遺跡	彦根市		●	●												伊庭功(1993)
38	墓ノ町遺跡	草津市		●	●												井上洋介(1993)
39	今川東遺跡	長浜市	●	●													北村圭弘・大崎康文・三輪晃三(1993)
40	鴨田遺跡	長浜市		●	●												滋賀県教育委員会(1992)
							●								●		川那辺正雄・中谷雅治(1973)
																	松室孝樹・重田勉(1998)
41	針江北・針江川北遺跡	高島市	●	●	●	●											滋賀県教育委員会(1992)
42	極楽寺遺跡	高島市			●	●											横田洋三(2007)
43	百済寺遺跡	東近江市															重田勉(2007)
44	霊仙寺遺跡	栗東市		●	●	●											中村健二(2007)
45	烏丸崎遺跡	草津市		●	●	●											小竹森直子ほか(2008)
46	入江内湖遺跡	米原市		●	●	●										●	瀬口眞司ほか(2008)
47	唐崎遺跡	大津市		●									●				伊庭功ほか(2008)
48	弘川佃遺跡	高島市	●														白井忠雄ほか(2008)
49	弘川常盤遺跡	高島市		●	●	●	●										葛原秀雄(2007)
50	堀川遺跡	高島市		●	●												宮崎雅充(2007)
51	千僧供養寺遺跡	近江八幡市			●	●	●										近藤滋・松澤修(1991)
52	馬淵遺跡	近江八幡市		●	●	●	●			●							浜崎悟司・田路正幸(1991)
53	石田三宅遺跡	守山市				●	●									●	平井美典(1991)
54	芦浦遺跡	草津市		●	●												造酒豊・田路正幸・坂梨咲子(1998)
55	湯ノ部遺跡	野洲市		●			●										造酒豊(1998)
56	上寺地遺跡	長浜市		●													稲葉隆宣(1997)
									●	●							稲葉隆宣(1996)
57	屋中寺庵寺遺跡	彦根市		●	●												伊庭功ほか(1997)
58	普光寺庵寺遺跡	彦根市		●	●	●	●				●	●					神保忠宏・細川修平(1997)
59	小中遺跡	近江八幡市			●	●	●										藤崎高志(1996)
60	芝原遺跡	彦根市			●	●	●										細川修平・神保忠弘・工藤基志(1996)
61	斗西遺跡	東近江市			●	●	●										植田文雄(1988)
				●	●	●	●									●	植田文雄(1993)
62	法勝寺遺跡	米原市		●	●											●	吉田秀則(1988)
63	蔵之町遺跡	東近江市			●	●										●	五個荘教育委員会(1986)
64	柿田遺跡	長浜市			●	●											仲川靖(1989)
65	高田遺跡	長浜市				●						●				●	宮成良佐・藤居朗ほか(1980)
66	滋賀里遺跡	大津市				●										●	田辺昭三(1973)
67	岩町塚遺跡	長浜市				●										●	松室孝樹ほか(1995)
68	坂口遺跡	長浜市	●	●	●		●		●		●						田中勝弘ほか(1984)
69	桜内遺跡	長浜市	●	●	●							●					田中勝弘(1989)
70	北郷里小遺跡	長浜市		●													稲葉隆宣(1997)
71	福満遺跡	彦根市		●	●	●						●	●				谷口徹ほか(2008)
72	鴨田遺跡	長浜市	●	●		●				●	●	●					中谷雅治・大橋信弥ほか(1973)
73	正福寺遺跡	守山市			●	●											小島睦夫(2011)
74	井の田遺跡	米原市														●	高橋順之(1992)
																	黒坂秀樹・沢村治郎(2010b)
75	顔戸遺跡	米原市		●	●	●	●					●	●				宮崎幹也(1990)

76	高溝遺跡	米原市		●		●							●				宮崎幹也(1990)
77	焰魔堂遺跡	守山市				●	●							●			畑本政美(2005)
					●												高居芳美(2006)
78	塚之越遺跡	守山市	●		●	●	●										伴野幸一(2005)
79	金森遺跡	守山市	●	●	●	●	●										大岡由紀子(2005)
																	水谷明子・板谷桃代・大櫛貢(2007)
80	服部遺跡	守山市		●	●	●											大橋信弥ほか(1986)
81	世継遺跡	米原市			●	●						●		●			兼廉保明・稲垣正宏(1987)
82	金剛寺遺跡	長浜市								●							同上
83	葛籬尾崎湖底遺跡	長浜市												●			中川治美・瀬口眞司ほか(2003a)
84	二ノ畦遺跡	守山市	●	●	●	●	●										岩橋隆浩・村井毅史(1995)
85	小島遺跡	守山市					●	●									山崎秀二・山田謙吾(1986)
86	志那湖底遺跡	草津市		●	●	●	●						●		●		濱修・小竹森直子・植田弥生(2011)
87	尾上浜遺跡	長浜市	●	●	●	●											中川治美・瀬口眞司ほか(2003b)
88	相模湖底遺跡	長浜市	●			●											中川治美・瀬口眞司ほか(2003c)
89	綾戸遺跡	竜王町	●	●		●	●										大東悟(2010)
90	杉ノ木遺跡	東近江市					●										北川浩・斎藤博史・杉浦隆支(2009)
91	中沢遺跡	東近江市		●	●	●	●										福田由里子(2010)
92	石田遺跡	東近江市		●	●	●											杉浦隆支・藤元康司(2010)
93	中兵庫遺跡	草津市	●	●	●	●	●										三宅弘・北原治ほか(2001)
94	笠原南遺跡	守山市			●	●	●										木戸雅寿・森格也(1987)
95	唐川遺跡	長浜市	●	●		●	●					●					用田政晴(1981)
96	吉身西遺跡	守山市		●	●	●	●							●			中村健二・濱修・細川修平(2002)
97	針江中遺跡	高島市					●							●			兼廉保明(1983)
98	越前塚遺跡	長浜市					●							●			宮成良佐(1988)
99	国友遺跡	長浜市	●	●	●	●	●				●					●	田中勝弘(1988)
																	浜崎悟司・稲垣正宏・北村圭弘(1988)
100	五村遺跡	長浜市		●	●												植野浩三・信里芳紀(1997)
101	下鈎遺跡	栗東市	●	●	●	●	●										辻川哲朗・重田勉(2003)
102	大塚遺跡	長浜市					●							●		●	大道和人・重岡卓・中村健二(1998)
				●	●	●											黒坂秀樹・山本孝行(2010)
103	墓立遺跡	長浜市		●	●						●						坂本正裕(1995)

参考文献

- 赤塚次郎 1986a 『S字甕』覚書‘85』『年報 昭和60年度』愛知県埋蔵文化財センター
1986b 『S字甕』について』『欠山式土器とその前後第3回東海埋蔵文化財研究会』愛知県考古学座談会
1990 「考察」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
1992 「S字甕とカメ」『庄内式土器研究』Ⅱ 庄内式土器研究会
1997 「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
2000 「雲出型甕の提唱と伊勢湾の台付甕」『東海考古学フォーラム三重大会 S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- 赤塚次郎・矢作健二
2003 「八王子古宮式と近江湖南型甕」『研究紀要 第4号』愛知県埋蔵文化財センター
- 石井智大 2010 「伊賀地域における弥生時代終末期～古墳時代前期の土器編年」『研究紀要 第19-1号』三重県埋蔵文化財センター
- 稲葉隆宣 1996 『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書XⅡ-1』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
1997 『上寺地遺跡 北郷里小遺跡 法性寺遺跡 墓立遺跡』同上
- 井上洋介 1993 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XX-5』同上
- 伊庭功 1993 『妙楽寺遺跡 尼子遺跡』同上
1997 『屋中寺廃寺』同上
- 伊庭功ほか
2008 『琵琶湖西南部の湖底・湖岸遺跡』同上
- 岩崎茂・小島睦夫
1993 『下長遺跡発掘調査報告書Ⅲ-守山市文化財調査報告書第50冊-』守山市教育委員会
- 岩崎茂・村尾政人ほか
2008 『下長遺跡第22次発掘調査報告書』同上
- 岩橋隆浩・村井毅史
1995 『野洲川左岸遺跡発掘調査報告書(事業名 二ノ畦遺跡)』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 植田文雄 1988 『能登川埋蔵文化財調査報告書 第10集』能登川町教育委員会
1993 『能登川埋蔵文化財調査報告書 第27集 斗西遺跡』同上
- 植野浩三・信里芳紀
1997 『五村遺跡 いきがいセンター建設に伴う発掘調査報告書』滋賀県虎姫町教育委員会
- 上村安生 2002 「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社

- 大岡由記子 2005『金森東遺跡(第 30 次)・金森遺跡(第 2 次)発掘調査概要報告書』守山市教育委員会
- 大崎康文 2012『針氏城遺跡 2』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 大沼芳幸・奈良俊也
1994『加茂遺跡・一ノ坪遺跡発掘調査報告書』同上
- 大橋信弥 1986『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 大東悟 2010『綾戸遺跡第 3 次発掘調査報告書』竜王町教育委員会
- 大道和人・重岡卓・中村健二
1998『県道東上坂近江線建設に伴う発掘調査報告書Ⅰ 南小足遺跡・常昌寺遺跡・大塚遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 大参義一 1968「弥生土器から土師器へー東海地方西部の場合ー」『名古屋大学文学部研究論集』XLVII 名古屋大学文学部
- 岡田雅人 2007『柳遺跡発掘調査報告書Ⅰ(平成 9 年度・平成 10 年度調査分)』草津市教育委員会
2008『柳遺跡発掘調査報告書(平成 11 年度調査分)』同上
- 岡田雅人・松田拓也
2014『中畑遺跡発掘調査報告書(平成 25 年度調査)』草津市教育委員会
- 角健一 2008『史跡大岩古墳群 富波古墳調査整備報告書』野洲市教育委員会
- 笠井賢治・館邦典
1995『小芝遺跡発掘調査報告(2 次)』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会
1996『小芝遺跡発掘調査報告(3 次)』同上
- 川崎志乃 2001「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」(『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター)
- 川那辺正雄・中谷雅治
1973『国道 8 号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書 2』滋賀県教育委員会・長濱バイパス北方遺跡調査団
- 川畑和弘 2014『下之郷遺跡確認調査報告書Ⅷー第 59・60・65・66 次調査報告書ー』守山市教育委員会
- 北川浩・斎藤博史・杉浦隆支
2009『東近江市埋蔵文化財調査報告書第 11 集ー国営日野川農業水利事業に伴う調査ー』東近江市教育委員会・東近江市埋蔵文化財センター
- 北原治ほか
2010『十里遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 北村圭弘・吉田秀則・三輪晃三
1993『ほ場整備関係遺発掘調査報告書ⅩⅩー1b』同上
1994『大東遺跡Ⅲ・八反田遺跡・中町田遺跡』同上
- 木戸雅寿・森格也
1987『一般県道荒見上野近江八幡線特殊改良第 1 種工事に伴う 笠原南遺跡発掘調査報告書』同上
- 木下義信 2013『山田町遺跡発掘調査報告書』守山市教育委員会
- 葛原秀雄 2007『弘川常盤遺跡』高島市教育委員会

倉田直純・穂積裕昌・伊藤裕偉

1992『城之越遺跡―三重県上野市比土―』三重県埋蔵文化財センター

黒坂秀樹・沢村治郎

2010a「近江北部遺跡出土外来系土器 13」『高月南遺跡Ⅰ』高月町教育委員会・
長浜市教育委員会

2010b「近江における外来系土器に関する素描(上)―畿内庄内式併行期前後の近
江北部の甕形土器を主として―」同上

黒坂秀樹・山本孝行

2010『大塚遺跡第 36 次発掘調査報告書』長浜市教育委員会

兼康保明 1983『新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要』
滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

兼康保明ほか

1978『森浜遺跡発掘調査報告書』同上

兼康保明・稲垣正宏

1987『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XⅣ-3 坂田郡近江町世継遺跡・長
浜市金剛寺遺跡』同上

五個荘教育委員会

1986『五個荘文化財調査報告 ほ場整備事業関係遺跡発掘調査報告書XⅢ-6』
五個荘町教育委員会

小島睦夫 2011『平成 21 年度国庫補助対象遺跡発掘調査報告書 守山市文化財調査報告
書』守山市教育委員会

越山邦夫・前川友秀・境宏

1995『沢代遺跡調査報告書―名賀郡青山町阿保字沢代所在―』青山町教育委員
会・青山町遺跡調査会

小竹森直子 1991『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器―第Ⅱ分冊 東海・近
畿・北陸編―』第 8 回東海埋蔵文化財研究会実行委員会編，東海埋蔵文化
財研究会

小竹森直子・吉川昌信・植田弥生

2013『琵琶湖東南部草津川地域の湖底・湖岸遺跡―第 1 分冊―』
滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会

小竹森直子・濱修・丸山真二

2014『琵琶湖西北部の湖底・湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・
滋賀県文化財保護協会

小竹森直子・中川正人・三宅弘

2014『琵琶湖東地域の湖底・湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・
滋賀県文化財保護協会

小竹森直子ほか

2008『烏丸崎遺跡・津田湖底遺跡―第 1 分冊―』滋賀県教育委員会・
滋賀県文化財保護協会

駒田利治 1981「神部遺跡」『昭和 55 年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
三重県教育委員会

- 小宮猛幸 2000『奥遺跡発掘調査報告書 1(昭和 63 年度・平成 3 年度・平成 8 年度調査分)』
草津市教育委員会
- 2003『中畑遺跡発掘調査報告Ⅱ(昭和 60 年度・平成 8 年度調査分)』同上
- 近藤滋・松澤修
- 1991『千僧供廐寺遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・
滋賀県文化財保護協会
- 近藤広 1996「布留式併行期の受口状口縁甕(辻・高野遺跡出土資料の検討を中心に)」
『滋賀考古 15』滋賀考古学研究会
- 2002「弥生から古墳時代における受口状口縁土器の地域性と広がり」第 117 回
考古学研究会 関西例会発表資料
- 2004「近江からみた弥生後期の伊勢湾地域一土器様相」『伊勢湾岸における弥
生時代後期を巡る諸問題：山中式の成立と解体』第 11 回東海考古学フ
ォーラム三重県大会実行委員会編
- 2005「愛知川・宇曽川流域の弥生土器」『近江 愛知川町の歴史』第 1 巻 古
代・中世編 , 滋賀県教育委員会
- 1992a『鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護
協会
- 1992b『針江北遺跡・針江川北遺跡(Ⅰ)』同上
- 佐伯英樹 2003「滋賀県野洲川流域の古式土師器編年」『古墳時代出現期の土師器と実年
代』シンポジウム資料集 (財)大阪文化財センター
- 境宏・福田典明
- 2005『沢代遺跡(2 次)発掘調査概報―三重県伊賀市阿保所在―』伊賀市教育委
員会
- 2006『沢代遺跡(2 次)発掘調査報告―三重県伊賀市阿保所在―』同上
- 坂本正裕 1995『墓立遺跡Ⅰ 弥生時代終末から古墳時代初頭の集落』滋賀県長浜市教育
委員会
- 重田勉 2007『百済寺遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 柴山圭子・竹田憲治・伊藤裕偉ほか
- 2007「IV 坂之上遺跡」『伊賀の考古資料 2』研究紀要第 16-4 号 三重県埋蔵
文化財センター
- 清水尚・大崎哲人・小竹森直子ほか
- 1993『一般国道 161 号(高島バイパス)建設に伴う新旭町内発掘調査報告書Ⅴ
針江川北(Ⅱ)遺跡・吉武城遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財
保護協会
- 白井忠雄ほか
- 2008『高島市遺跡調査報告書―平成 19 年度―』高島市教育委員会
- 仁保晋作 1985「Ⅳ 名張市中村 観音寺遺跡」『三重県埋蔵文化財調査報告 72 昭和 59
年度農場基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会
- 1992「阿山町東山古墳の遺構と遺物」『研究紀要 第 1 号』三重県埋蔵文化財
センター

- 神保忠宏・細川修平
1997『県道彦根愛知川線道路改良工事に伴う 普光寺廃寺遺跡発掘調査報告書』
滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 杉浦隆支・藤元康司
2010『東近江市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 平成21年度 市内遺跡の
調査』東近江市教育委員会・東近江市埋蔵文化財センター
- 瀬口眞司ほか
2008『入江内湖遺跡Ⅱ』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 高居芳美 2006『焰魔堂遺跡第9次発掘調査報告書』守山市教育委員会
- 高木洋 1998「濃尾出土のS字甕形態モデルの作成(1)」『第7回東海考古学フォーラム
岐阜大会 土器・墓が語る美濃の独自性～弥生から古墳へ～』東海考古
学フォーラム岐阜大会実行委員会
- 1999「濃尾出土のS字甕形態モデルの作成(2)」『美濃の考古学』第3号
美濃の考古学刊行会
- 高橋順之 1992『伊吹町文化財調査報告書第3集 伊吹町内遺跡分布調査報告』伊吹町教
育委員会
- 田中勝弘 1984『北陸自動車道観連遺跡発掘調査報告書－伊香郡余呉町坂口遺跡－』滋賀
県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 1988『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書10 長浜市国友遺跡』同上
- 1989『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書XⅠ－伊香郡余呉町桜内遺跡－』
同上
- 田辺昭三 1973『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会
- 谷口徹 2008『城南小学校校舎増築に伴う発掘調査報告 福満遺跡X・XⅠ』彦根市教
育委員会
- 辻川哲朗・重田勉
2003『下鈎遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 徳網克己 2004『中主町内遺跡発掘調査年報』滋賀県野洲郡中主町教育委員会
- 中浦基之 1993『小芝遺跡発掘調査報告－三重県上野市服部町所在－』上野市教育委員
会・上野市遺跡調査会
- 中川治美・瀬口眞司ほか
2003a「葛籠尾崎湖底遺跡」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7
琵琶湖北東部の湖底・湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財
保護協会
- 2003b「尾上浜遺跡」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7 琵琶
湖北東部の湖底・湖岸遺跡』同上
- 2003c「相撲湖底遺跡」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7 琵琶
湖北東部の湖底・湖岸遺跡』同上
- 仲川靖 1989『柿田遺跡発掘調査報告書－県道中山東上坂線道路改良事業に伴う埋蔵文
化財発掘調査報告書－』同上
- 永草康次 1992「S字状口縁台付甕の胎土」『庄内式土器研究Ⅱ－庄内式併行期の土器生
産とその移動－』庄内式土器研究会

中谷雅治・大橋信弥ほか

1973「Ⅱ鴨田遺跡」『国道8号線長浜バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

滋賀県教育委員会

中村健二 2007『霊仙寺遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

中村健二・濱修・細川修平

2002『県立成人病センター改築事業に伴う発掘調査報告書 吉見西遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

中村智孝 2008「近江南部地域における弥生時代後期の土器について」『柳遺跡Ⅳ 草津市青地町 本文編』同上

名張市遺跡調査会

1978『蔵持黒田遺跡』名張市遺跡調査会

西森平之 1983『才良遺跡発掘調査報告―三重県上野市才良所在―』上野市教育委員会

畑本政美 2005『焰魔堂遺跡第4次発掘調査報告書』守山市教育委員会

畑本政美・伴野幸一・川畑和弘

2008『守山市文化財調査報告書』同上

濱修・小竹森直子・植田弥生

2011「志那湖底遺跡の調査」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書

10 七条浦遺跡・志那湖底遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

浜崎悟司・稲垣正宏・北村圭弘

1988『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 15・1 長浜市森前遺跡・国友遺跡・小沢城跡・坂田郡近江町正恩寺遺跡』同上

浜崎悟司・田路正幸

1991『馬淵遺跡発掘調査報告書』同上

濱村友美 2013「3世紀前後の伊賀地域の交流と役割―受口甕とS字甕の分析を通して―」『TRIO』Vol.15 三重大学大学院人文社会科学研究科

早野浩二 1996「『S字甕0類』をめぐって―研究の現状―」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

2000「S字甕の履歴(1)―伊勢湾沿岸地域における出現から定着まで―」『東海考古学フォーラム三重大会 S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局

伴野幸一 2000「湖南地域における弥生集落の動向―野洲川流域の弥生時代中期後半から後期の集落をめぐって―」『みずほ』第33号 大和弥生文化の会

2003「滋賀県野洲川流域の遺跡群と受口状口縁甕の変遷―近江における古墳出現期の土器と年代―」『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集, (財)大阪府文化財センター

2005『塚之越遺跡発掘調査概要報告書―塚之越遺跡 17・18次発掘調査概要』守山市教育委員会

2006「第1部古式土師器編年集成 近江地域―野洲川流域を中心に―」『古式土師器の年代学』シンポジウム資料集, (財)大阪府文化財センター

2008『伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ』守山市教育委員会

- 2009『伊勢遺跡確認調査報告書Ⅶ』守山市教育委員会
- 平井美典 1991『石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅱ－滋賀県住宅供給社宅地造成事業に伴う－』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 平井美典ほか
- 2008『草津川改修事業ならびに草津川放水路建設事業に伴う発掘調査報告書 柳遺跡Ⅳ』同上
- 深澤芳樹 1991「弥生土器の基部成形手法」『唐古』田原本唐古整理 OB 会
- 福田典明 2004『北門遺跡(1次)発掘調査報告』上野市教育委員会
- 福田由里子 2010『東近江氏埋蔵文化財調査報告書第13集 中沢遺跡(19次)』東近江市教育委員会・東近江市埋蔵文化財センター
- 藤居朗 2001『谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ(平成元年度調査分)』草津市教育委員会
- 2005『襖遺跡発掘調査報告書Ⅱ(平成6年度・7年度調査分)』同上
- 藤居朗・小宮猛幸
- 2004『中畑・谷遺跡発掘調査報告書(昭和61年度・平成4年度調査分)』同上
- 藤居朗・谷口智樹
- 2006『御倉遺跡発掘調査報告書(昭和61年度・昭和62年度・平成5年度調査分)』同上
- 藤居朗・山元祐人
- 2008『西海道遺跡発掘調査報告書』草津市教育委員会
- 藤崎高志 1996『慈恩寺遺跡ほか』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 2009『関津遺跡Ⅱ』同上
- 藤崎高志ほか
- 2010『関津遺跡Ⅲ－第2分冊－』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 細川修平ほか
- 2014a『蛭子田遺跡1』同上
- 2014b『蛭子田遺跡2』同上
- 細川修平・神保忠弘・工藤基志
- 1996『県道彦根愛知川線改良工事に伴う－芝原遺跡発掘調査報告書－』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 穂積裕昌 1991「Ⅰ上野市上神戸 浮田・高賀遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊－』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
- 2005「東海系土器に占める伊勢系土器の位相～受口甕胎土分析からの提起～」『研究紀要 第14号－創立15周年記念論文集－』同上
- 堀真人ほか
- 2010『肥田城遺跡 肥田西遺跡 鶴田遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 松沢修・稲垣正弘・細川修平
- 1990『錦織・南滋賀遺跡近江国庁跡発掘調査概要Ⅳ』同上
- 松室孝樹 1994『堀部西・丸岡塚遺跡、春近遺跡、南小足遺跡』同上

- 1995『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X X II - 2 堀部遺跡 堀部西・丸岡塚遺跡 南小足遺跡 北郷里遺跡 岩町塚遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 松室孝樹・重田勉
1998『室遺跡 宮司遺跡 I 鴨田遺跡 V』同上
- 丸山竜平 1974「近江和邇氏の考古学的研究」『日本史論叢』4 日本史論叢会
- 造酒豊 1998『湯ノ部遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 造酒豊・濱修
1990『六条遺跡発掘調査報告書』同上
- 造酒豊・田路正幸・坂梨咲子
1998『芦浦遺跡』同上
- 水谷明子・板谷桃代・大櫛貢
2007『守山市文化財調査報告書 金森遺跡(第3次)発掘調査報告書』守山市教育委員会
- 味噌井拓志 2010「古墳時代初頭の伊勢湾系土器波及にみる伊勢地域の役割についてーヒサゴ壺の分析を通してー」(卒業論文)
- 2011「地蔵僧遺跡」『亀山市史』亀山市
- 三宅弘・北原治ほか
2001『中兵庫遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 宮崎雅充 2003a『熊野本古墳群 I - 分布測量・6号墳・12号墳 範囲確定調査報告書 -』新旭町教育委員会
- 2003b『正伝寺南遺跡発掘調査報告書』新旭町教育委員会
- 2004『新旭町遺跡調査報告書ー平成13～14年度ー』同上
- 2007『堀川遺跡発掘調査報告書』高島市教育委員会
- 宮崎幹也 1986『県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書Ⅲ』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 1988『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X V - 3』同上
- 1990a『近江町文化財調査報告書第4集 高溝遺跡』近江町教育委員会
- 1990b『近江町文化財調査報告書第5集 顔戸遺跡』同上
- 1994「北近江の土器様相」『庄内式土器研究VI 近江系土器の実態とその移動』庄内式土器研究会
- 宮崎幹也・仲川靖
1986『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X III - 2』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 宮成良佐 1988『越前塚遺跡ー加納工業団地造成関連ー』長浜市教育委員会
- 宮成良佐・藤居朗ほか
1980『高田遺跡(長浜電報電話局敷地内所在)調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 村木誠 2005「伊勢湾地方における台付甕の作り方ー弥生時代後期を中心にー」『日本考古学』第21号日本考古学協会

- 用田政晴 1981「唐川遺跡」『ほ場整備関係発掘調査報告書 9-1』同上
 1985『余呉町埋蔵文化財発掘調査報告書 1-余呉湖底遺跡・松田遺跡-』余呉町教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 森岡秀人 1992「3 弥生土器畿内様式の東方波及一正統凹線文時文化の伊賀・伊勢への伝播と定着について(予察)一」『紀伊半島の文化史的研究 考古学編』関西大学文学部考古学研究室
- 森川常厚・五十棲孝子ほか
 2004『北門遺跡(第3次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 門田了三 1980「前山遺跡群における弥生式土器・土師器への一考察」『名張市遺跡調査概要Ⅲ』名張市遺跡調査会
- 山川芳志郎 2009『欲賀南遺跡第4次発掘調査報告書』守山市教育委員会
- 山崎秀二・山田謙吾
 1986「小島遺跡発掘調査報告書」『守山市文化財調査報告書(第8冊)』守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター
- 横田洋三 2000『法光寺遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
 2007『極楽寺遺跡』同上
- 吉田秀則 1988『一般国道8号線(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ-狐塚遺跡・法勝寺遺跡-』同上
 1989『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ』同上
 2008『弘前遺跡・赤野井遺跡』同上
 2009『弘前遺跡』同上